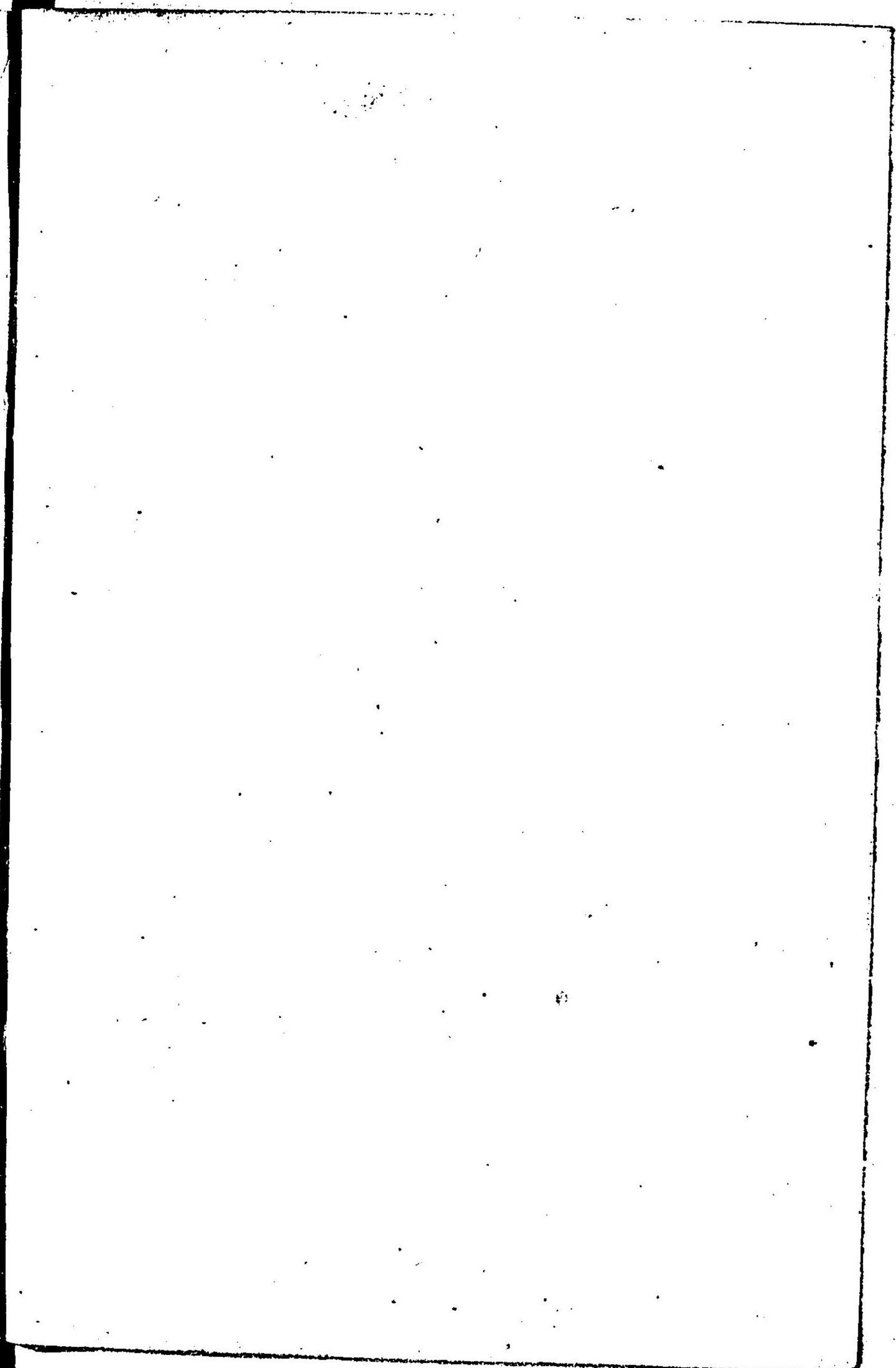


1-2
340

素
能
精
子
操
性
也



持64
28

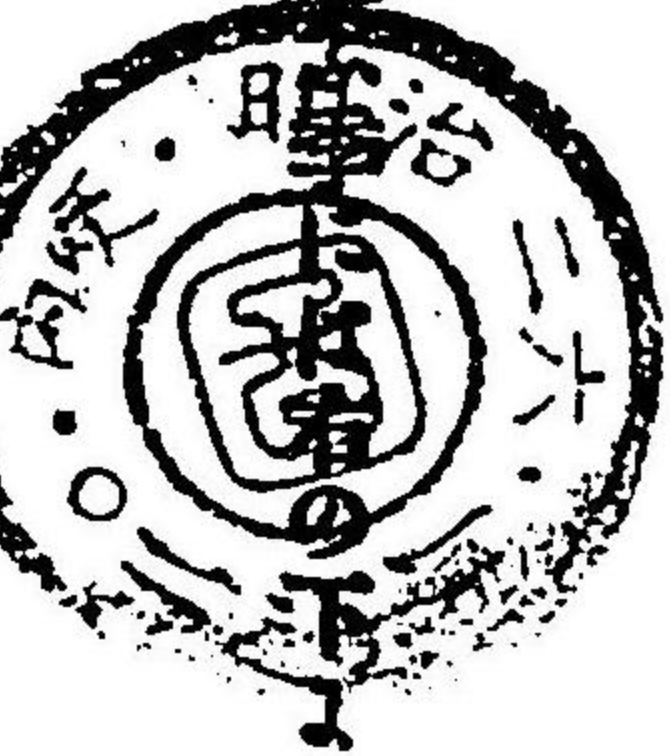


俳諧手挑灯

目錄

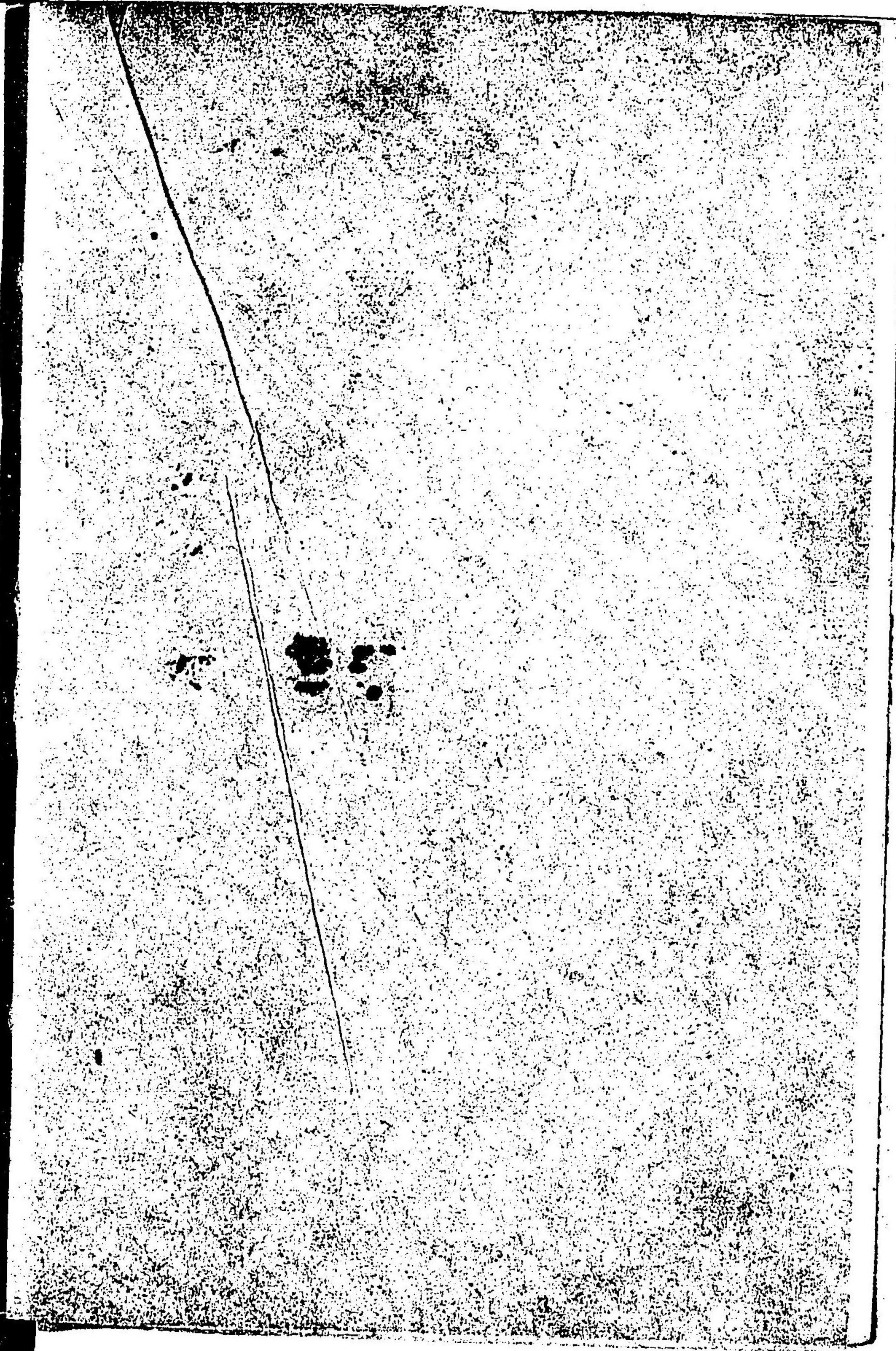
一 四季之詞 コトメ

但春三ヶ月にかよひ用ル季有三ヶ月に通
●如此黒星を付置なり四季共ニ同斷



- 一 戀 コトメ 非戀
- 一 述懷 シニツクワイ 非述
- 一 居所 キヨシヨ 非居
- 一 夜分 ヤブン 非夜

- 一 天象 テンシヤウ
- 一 降物 フリモノ
- 一 釋教 シヤクキヤウ 非釋
- 一 無常哀傷 ムジョウアハツ
- 一 人倫 ジンリン 非人
- 一 山類 サンライ 非山
- 一 水邊 スイヘン 非水

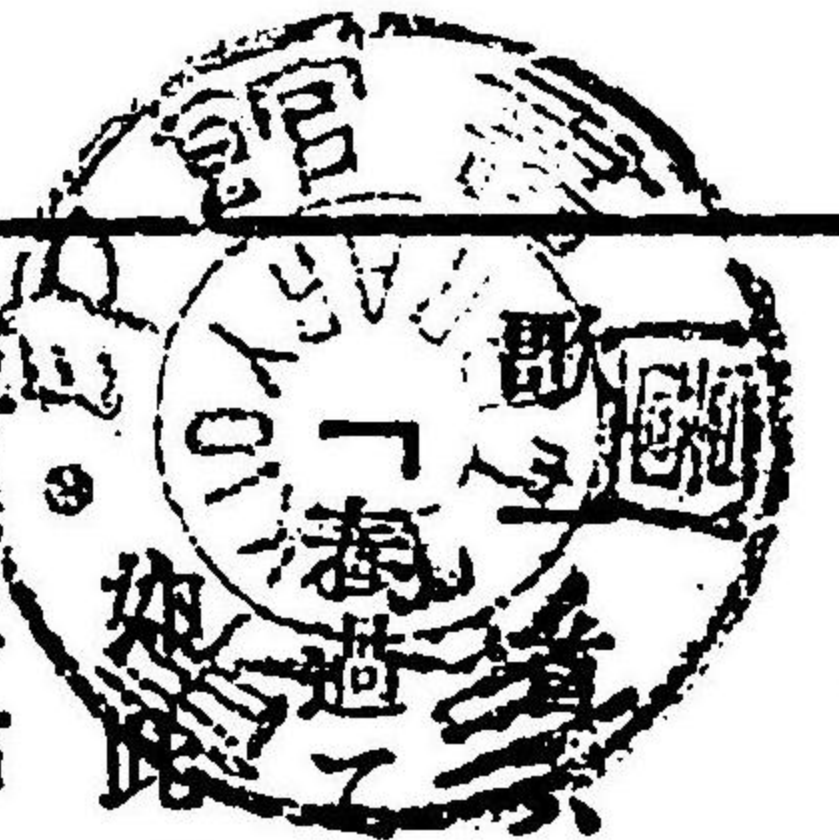


- 一 衣服イフク 非衣ヒイ
- 一 生類シヤウ
- 一 旅リョ 躰タイ
- 一 支シ 躰タイ = 支体付やう
- 一 書シヤウ 躰タイ
- 一 風フウ 躰タイ
- 一 同字ドウジ 字去之事
- 一 同付字ドウフジ 之辨ノハカ
- 一 月ツキ 之辨ノハカ
- 一 以呂波イロハ 寄手ヨシテ 爾於業大概
- 一 發句ハツク 切字并發句 歌仙カセン
- 一 食類シヨウ
- 一 植物ウエモノ 同高低
- 一 器財キザイ 二器財付やう
- 一 名所ナシヨ 二名所付やう
- 一 火躰カクタイ
- 一 病躰ビョウタイ
- 一 同別ドウベツ 險ケン
- 一 賦物フツモノ 取樣トリヤウ
- 一 花之辨ハナノハカ

俳諧手挑灯

凡例

三十一字



「春過」夏來にけらし「白妙の」衣ほすてふ「あまの香久山

知此詞のいき五義也篇序題曲流ト云

五もじ七もじ五文字此十七文字を上の句ト云 七もじ七もじ此十四文字を下の句ト云

上下合せて三もじ一文字なり

上の句篇序題にして下の句曲流なるもあり

又上の句曲流下の句篇序題もあり

詞の姿カタ 六義也 風賦フウフ 比興ヒキョウ 雅頌ヤウソウ ト云

連歌俳諧は歌一首の上の句下の句を二句に分てするなり

連句は上の句に下の句を附下の句に上の句と段々に附歌仙は三十六句百員は百句するなり

發句トハ一座の巻頭初發の上ミの句に春夏秋冬等その時々季を入レ切字を入らずらか句つくるべし四季の詞并切字入やう品くの發句あまた末に載るよく味ひしるべし

脇トハ下モの句に發句と同一季を結び發句の心をよくうけて文字留りにすべし

但時候遲速といふ事あり遲速とはおそしはやしといふ事なりたとへは彌生の發句に正月の季よてはつかす正月の發句に彌生の脇もわろし正月は正月の季二月は二月の季にてすべし

第三トハ

上句の句にて脇べしかくつかす共一句のたけ高く發句の体にならざるやうよ三季にわたる季にてすべし

三つきよわたる季とは正月より三月迄よかよう季あり
四季の詞の部に如し黒星を付置は三つきよ渡る季なり
四季とも同断

留りはいつともて留メよし
但ふしのでて有時は留メらん留メもなしとも留ル外の留りは不好
みしのでとはワキの七文字よての字有時は第三て留メ惡し

四句目ハ雜の句なり(雜トハ)季のなき句をいふなり

五句目ハ月の定座ふり月の句をすべし月は秋よて此次秋二句つけて秋三句つすべし

六句目ハ秋ふれ迄を初表といふ此内 神祇 釋教 戀 無常
是より初表と云裏角共いふ
此次 神祇 釋教 戀 無常 述懐等何よてもすべし

あけ句 拂とも巻軸ともいふかせん百員等終りの句なり花戀の句ならばあけ句も戀なり神祇の句ならば神祇にすべし余も准之

句數月花の定座等末に委く記す花歌仙の巻を末に載る句段仕やうよく味ひしるべし

歌仙句數法

初表六句内五句メ月の定座六句メ八月ふぼさす

初裏十二句内七句メ月十一句メ花十二句メ八月ふぼさす

此十八句を一折といふ

名残表十二句内十一句メ月
 同裏六句内五句メ花是をにほひの花といふ
 此十八句も一折
 二折合テ三十六句也

初表一折八句内七句メ月
 二表一折十四句内九句メ月
 三表一折十四句内十三句メ月
 同裏一折十四句内九句メ月
 同裏一折十四句内十三句メ花
 名残表一折八句内七句メ花なり此裏月なし
 百韻法
 右四折合テ百員也
 初メ二折合テ五十員ト云
 四十四法

百員の初折ト名残の折ト合テ四十四句ナリ
 右二折ニ月三ツ花ニツ法百員のとし
 七十二候
 百員の初折ト二ノ折ト名残の折ト三折合たるなり
 右三折ニ月五ツ花三ツ法百員のとし

初表六句内五句メ月
 二表六句内七句メ月
 同裏六句内七句メ月
 同裏六句内十一句メ花
 源氏法
 歌三折ニ月五ツ花三ツ法百員のとし
 仙折ニ月五ツ花四句メ花
 米字八十八句
 初裏八句内七句メ月
 初裏十二句内七句メ月
 初裏十一句メ花

二ノ表 十二句 内十一句メ月
 三ノ表 十二句 内七句メ月
 同ノ表 十二句 右同断
 同名表 十二句 右同断
 同残表 八句 内七句メ花
 右四折 二月七ツ花四ツなり

首尾

歌仙ハ 初表 六句 五句メ月 合テ十二句スルヲ云
 初表 六句 五句メ月 合テ十二句スルヲ云
 名残表 八句 七句メ月 合テ十六句スルヲ云
 名残裏 八句 七句メ月 合テ十六句スルヲ云

裏白 六句カ 表斗リスルヲ云
 八句カ 裏斗リスルヲ云

面白 十二句カ 裏斗リスルヲ云
 十四句カ 裏斗リスルヲ云
 三ツ物 發句脇第三マデ三句スルヲ云

花月 發句か脇か第三かに出たる時は初表の月出さず
 發句か脇か第三かに出たる時は初裏の花をせず梅か櫻を花の座にすべし

發句トハ 戀ならハ脇も戀にてすべし
 但し正花は第三迄はすべし
 四句メより初表の内いたさず

同 神祇ならハ脇も神祇よし有り無し
 尺教ならハ脇も尺教よし有り無し

同 述懐無常等は發句斗りにてくるしからず

同 哉留りの時は第三にて留メすべからず口傳

會席トハ 文臺に硯并詠草を飾宗匠を招請し連中より合たる座敷をいふ
クワイセキ ブンダイ エイサウカサリウシヤウテウシヤウ

連句トハ 歌仙并百員等の事なり

一順トハ 發句より會席の人數有次第一句ツ、書留たるを云

再遍トハ 右の人數の句又一通り廻すをいふ

聯トハ 春。夏。秋。冬。各三句ツ、夏冬二句ツ、戀三句等つゝき濟たるをいふ

吟^{キン}聲^{セイ}トハ句を高聲にとなへるをいふ
 回^{アキ}島^トトハ一人にて二句も三句もついでしてするをいふ
 獨^{ドク}吟^{キン}トハかせんにても百いんにても一人にてするをいふ
 兩^{リョウ}吟^{キン}トハ同じく二人にてするをいふ三吟も五吟も同じ事
 前^{ゼン}句^クトハ我可^レ付^マへの句をいふ
 遲^チ吟^{キン}トハ句作りのおそきをいふ
 秀^{シュウ}逸^{イツ}トハすぐれて能句をいふ
 卷^{クワン}頭^トトハ發句をいふ
 添^{ソフ}削^{セウ}トハ一筆の点を宗匠へ乞をいふ
 即^{キョク}点^{テン}トハ早速点の出来るをいふ
 批^ヒ言^{ゴン}トハ句のあしきところを宗匠よりとがめてきたる事

加^カ筆^{シツ}トハ句のあしきところをなをして書添たるなり
 褒^{ホウ}美^ビトハ句をほめたる事なり
 筆^{フデ}句^クトハ連中の外に執筆よりする句よて主なき句なり
 打^{ウチ}嫌^{ケン}越^{キヤク}トハ付てはくるしからずして二句へだつをいふ
 二句去トハ付句より二句へだつをいふ
 三句去トハ付てはくるしからずして三句へだつをいふ
 字去トハ付句より三句へだつをいふ
 五句去トハ付句より五句へだつをいふ
 衣^イ李^リヤ竹^{タケ}田^ダの^ノ松^{マツ}枕^{マクら}煙^ケ五^イ句^クさる
 此分析面かはりても五句去なり
 七句去トハ付句より七句へだつをいふ

面去トハ 百員八面の一面をへだつをいふ但シ表も一ト面裏も一ト面といふなり表裏のおもてよはあらすして見わたす一ト面のふとなり
折去トハ 百員四折の一ト折をへだつとあり

一ツ二ツ四ツ八ツトハ 品々輕重によりて百句にいくつと云數之訓に四ツ有ものは音にも四ツ有あり
百千万のとし訓音か
はりては面去あり

名所 國名○在名等或ハ官名○苗字○人の名などに呼ときは名
所にあらず水邊山類にあらずるれくの躰を遁なり

時々の草木葉句段食物になればその季の持ながら植物をのが
るゝなり魚鳥獸等も食物になればその季の持ながら生類の
かるゝなり紋所或のもやうのしなくも季は持ながら躰の
がるゝあり

釋奠 春 二度あれども春後といへば秋

振父入 春 二度あれども春後といへば秋

離 三月 二度あれども春後といへば秋

峯入順 春 逆 秋 二度あれども峰入と斗は 秋

古代より初表の内嫌ひ來る物の中に古人の名の事聖賢公家武
家或は歌人儒者醫者町人百姓能役者職人等の神祇釋教戀無
常述懷哀傷等にあらざる古人の名表の内苦しからす尤在がと
くすべし同名所の事神祇釋教戀無常述懷等にならざる名所並
國名町郡等表の内苦しからす旅休右同斷

野々口立甫夜話云七十二候花信詩抄等之季俳諧ニ取捨有事也
詩歌を引も同斷七十二候に蝶蠅鳴は夏詩に鳴蛙秋にあれども
連俳どもに春なり和歌に牡丹春花信ニ棟春これらを連俳にて

夏あり此わかちをしらずして詩歌候を引或は詩書等にて異様なる季を見出し俳諧を錯亂すべからず當時の四季正月元朝より極月に至細々委く此書に記置なり不通成ル季不用餘興ヨキヤリの事古來いなきとあるをいつのところよりか百員の擧句アゲクに發句あらで常の折かはるごとく句を繼て表八句裏十四句月花并々嫌等常の百員の法式少も違へずして百員結ひ次て續二百員或續三百員と呼也

但シ余興うつり二句去三句去の物は式に去五句去七句去面去折去物みな三句去にてするなり

俳諧手挑燈

○四季之部

春 大皞ダイコウ帝テイ勾コウ芒マウ神シン蒼ソウ天テン 東トウ君クン 詔セウ光コウ

夏カ正セイ

正月タイソツ 大簇ダイソツ律リツ立テイ春シュン節セツ 雨ウ水スイ中チュウ初ソ陽ヤウ 青セイ陽ヤウ
孟メイ春シュン 陬ソ月ゲツ 睦ムツ月ゲツ 端タン月ゲツ 初ソ雲ウン月ゲツ
いいわわ井イ月ゲツ 太タイ郎ロウ月ゲツ

元日ゲンニチ 元朝ゲンテウ 元且ゲンニヂ 元三ゲンサン
鶏ケイ且ニヂ 改且カイニヂ 叔氣シユクキ 聖節セイセツ
履レイ端タン 年始ネンシ 年頭ネントウ 改年カイネン
甫フ采サイ 新正シンテイ 三朝サンテウ 三始サンシ
としのはじめ
月のはじめ
日のはじめ

三元	復新	新春	千代の春
君か春	御代の春	四方の春	花の春
宿の春	けふの春	けさの春	たつ春
たつ年	日の始	年の花	若き年
あらし玉の年	年立かへる	四方拜	天子東西南北 拜し給ふを云
朝拜	天子を元朝に拜し申さるゝなり	腹赤贅	肥後の國よ り鱈の魚を
天子の御節會に供するふり	氷乃様	元朝氷を奉るあつき時は翌 年うすき時は凶年といふ	
屠蘇	いまだかせざる小女嘗はじめ	井開	早つみ井解井花水若水元朝 早天よ汲初そむる水にいふ
天子へ奉り諸臣も祝ふふり	井開	祇園削掛	元朝寅刻 行神事ふ
和州吉野の土民手初に禁庭よて歌笛	有美形の民といふ	福藁	
福鍋	年徳神	年神	
恵方棚	掛鯛	年棚	

押鮎	注連飾	男年	庭竈
恵方	初鶏	齒朶	數の子
標	俵子	初霞	齒固
かんを祝	大服	にし肴	初空
穂長	田作り	鏡餅	喰積
太箸	裏白	開豆	初曆
曆開	とし玉	御慶	門松
かざりわらかざり柿大飾	但シ飾かざり炭飾海老	雑煮	いりふくし貝むすびあぶ 大ふん辛頭ふれらを祝ふ
とすは	元日なり	蓬菜	かちぐりくし柿海老野佐橋柚
あさつり	雨ふり	いねつむ	元日の 晝寐なり
福壽艸	元日草	いねあくる	トハ元朝の 寐覚なけ
		きろ初	節衣を 着初なり

寶船 寶は元日也 鋪は元日也 寶は獵なり

弓始射初

万歳 福引

若るびす

謡初 寶引

大黒舞

舞初 毬打

るびす廻

彈初 水祝

猿まはし

松囃 水祝

船乗初

吹初 はま弓

はこ板

藏開 鳥追

船玉祭

店御 初賣

湯殿初

春永 歳且開

羽子

初芝居 二のかわりといふあり 初狂言といふあり

懸想文 京にて初春にいろくの艶書を封てなり年中の

意のよしあしを占ふ

馬乗初 飛馬初といふ

三ヶ日

鏡開四日

六日年越

若菜摘

るぐつむ

をばき摘

七種 芹セリ薺ナツナ鼠御草コキヤロ俗母子脚 蕨ハユメヲ

白馬節會 七日の禊禁庭へ白馬をひかせ給ふ事白色は青色の本色あり

踏歌 男とうか十五日あしはしりといふ歌うたうて御廊下を

かざしの錦 踏歌を舞ふに錦を以て花をふしらへ

遊び 小松引子は水の方角ゆへ 初寅の日 鞍馬参り 壽命千年なるにあやからんと祝義なり 初寅の日 ふだおろし

初卯の日 住吉参り

箕面の富突 七日

十日るびす

宮大 女王祿を給ふ

八日 女叙位 同上

卯杖 初の卯の日 桃柳等五尺三寸に切禁中へ奉る

常陸帯の神事 鹿しま祭あり女のおもふ人数多ある時その男ごもの名を布張帯にしるし神前に置その中に裏かへりたるをひ

の名にて夫にさ だむるなり 縣召 除目といふ正月十一日より十三日まで外國の人を

御連歌 十一日 武具鏡開 二十日 網引 十四日 御薪 十一日百官

佐義長 十五日 爆竹トギ 網引 十四日 御薪 十一日百官

たてま 土龍打 樹木の呪なり 粥占 十五日 御忌 十五日より

つる 男を産めといふ賀なり 淨土宗の法會 上元日 十五日 小豆粥祝 同上 三保參 同上

賭弓 十八日弓場殿にて 天子弓を御覽なり 嫌破の字三句去り 但宿下りは雜あり

六餅 同上 厄神參 十九日 八幡へ參詣して蘇民將來の

吉田清稜 十九日 初天神 廿五日 初不動 廿八日 繪踏 切支丹を

押仕廻ふ此日押たる札敷にて 一年中足り不足なくありと云 梅 好の花春つけ草香散草匂ひ草しら梅 柳 青柳風見草した

岩柳 柳腰 ふふ柳めはり柳 鶯 金衣鳥 歌よみ鳥 きなふ鳥 黄鳥に ぼひ鳥 經よみ鳥 鶯の音 鶯ふる部

公結ひ 夏露 霜 雪 枯木 千鳥 等結ひても春 霞 八重かすみかす みの衣霞くむ

霞の海うす霞 十かへりの花 雪解 雪きゆる 残る雪 雪なだれ 雪しづも ゆき間ゆき

若草 初草 新ライ草 ひまばへ 若 青のりあるのりおふのりうたのり

山笑 ふ 山く の草木葉を 青を 踏 芽出たるをふむ

春鷹 白尾 繼屋 朝鷹 泊り山 鈴あさす 泊り狩の鈴鳴さすと

遊糸 陽炎 野焉 糸遊ふかけるふ 風光 陽氣の登る立

佐保 姫 春の色を染出す神 但非神底 風光 陽氣の登る立 百千鳥

角ぐむ蘆 玉江咲若葉なりの水鳥嘯サエツル
 蓮の根堀 鳴鳥狩 草からばし 罌粟の若葉
 猫さかる 猫の妻戀 野大根 落の莖フキ
 水ぬるむ 田をすく 若和布 木の芽
 青からし 雑菜摘 三葉芹 根白草芹なり
 娶が萩 魚氷よ登 獺魚を祭 麗ウラ、カ
 長閑 水和 鳥嘯 蕨ホレンシ
 暖 遅日 水解 鶯鳥
 獨活 鱒 凍解 春雨
 雲雀 防風 土筆 鯉サワラ
 畑打 鳩 土筆 蜆シジミ

餘寒 畑返 鮒膾フナナマス 芽花ツバナ
 蝸 兒花 芹 暮寒 種子物 海雲
 鹿尾 鶯菜 烏芋 青饅頭 野老
 蔓 干鱈 酢蛤 草萌芝生コノシロ
 膏雨カウ 白魚目指 東風ユズ 風あゆの風 今年コトシ 去年クニ
 春ならぬ 春しらぬ 行春 春風ハルカゼ 春麻ハルマ 氣氏キウジ 春ハル
 といふ 椿ツバキ 古代は花椿とせされば維イ 衣更着 梅見月
 二三月 夾鐘律ケツ 驚蟄節ケイ 春分中 仲春 陽中
 如月 令月 衣更着 梅見月
 小草生月初花月

五加本	藍ま	松むしり鳥	彼岸櫻	菜の花	二日灸
大根の花	八重櫻	花を待	かつら草	菜の花	二日灸
若紫	初櫻	初花	蒲公	菜の花	二日灸
杉菜	孕鹿	馬刀	狗脊	菜の花	二日灸
枸杞	接木	孕雀	田螺	菜の花	二日灸
胡葱	野蒜	接穂	蒜	菜の花	二日灸
韭	蒸鱧	引鶴	雀の子	菜の花	二日灸
もろこ	鳳巾	引鶴	雀の子	菜の花	二日灸
三月	姑洗	清明節	穀雨中	季春	中和

花飛 竹秋 宵月 櫻月 彌生

い や よ ひ

櫻月

宵月

彌生

上巳 三日 桃旦重三元巳

紙ひな 柳かつら ひな飾

曲水の宴 三日 巴宇蓋ハシノサカヅキ 羽鶴飛川上より盃をな

沙干 住吉・加多・早川などあり 給ひるふ。土作の海硯石取 鶏合 關島共

寒食 三月の節前二日なり 杏の粥・麥の粥 己の日の稜 上の巳日川邊にて 疫神除の稜あり

須戸の稜 源氏 經供養 天王寺 高雄法華會 十日 壬生の佛

やすらひ花善導忌 十四日 壬生祭 廿五日マデ 壬生の猿

嵯峨大念佛 十五日 千本念佛 寺中のはふ さかりに勤ム

御身拭 十九日さかの釋迦汗ふがるいた拭と云御身赤桐檀

人麿忌 十八日 御影供 廿一日 眞言宗あり 高野東寺 高雄の女詣 廿一日

吉野の會式十日

淺草祭 十八日三社

梅若詣 十五日 順の峰入 逆の峯入 秋なり 峯入と斗秋一年二度ある物 順逆の事當時不分明 阿蘭陀わたる 入津する事なり

鞆靴 フラコ、エサバリ しょうせんのたはふれ半仙のたはふれともいふもろふし だへつしる其上へ乗美女た くて皮を以てふこのやうふしらへ花の木枝よりえ

ちよゆすらるいなり 花盛 正花に成分花の 櫻 おそ櫻一重櫻 八重櫻 瀧さくら山さくら 家櫻 いせさくら 狝さくら 搥か

櫻 ま櫻 妍さくら 淺黄櫻 酒櫻 人丸櫻 江戸さくら 雲井櫻 勾さくら 西行櫻 てまり櫻 庭さくら したれ櫻 貴妃櫻 あり明櫻 谷さくら きり 八糸さ

くら 黒染櫻 布引櫻 櫻狩櫻人 草 藤戸不斷櫻 藤 藤棚 藤浪 藤かつら 藤つる 白藤 藤

桃 俳桃 自桃 姫桃 けもののはな 躑躅 赤熊ついで 蓮花 ついで 天か下 ついで 青海波 ついで 開山 ついで 江戸 ついで のいめついで

紫雪 ついで 小式部 ついで 源山 ついで きささき ついで 餅 ついで 明のついで 流川 ついで 霧島 ついで

つほれふ藤 樹たまふ けまん草 藤牡丹さいふ 茶摘 手始の 山吹 秋冬 加きのどう 柿あ

すきのふなり俗つく はれと云羽子に似り 蓮錢 蓮に似て 小き水草なり

けまん草 花は藤葉は牡丹に似り 茶摘 手始の

田鼠化て鶉と成 田鼠と唱へし田の風に 蚕 桑子

來鶉 あいふき 海棠 ねむれる花 につくら草

梨の花 軒のつまなし 令法 是はたつ 草 つほすみれ

連翹 沈丁花 毛びね 馬酔木の花

葉櫻 棗の花 竹の秋 林檎の花

葉柳 李の花 小手毬 杏子の花

辛夷 木蓮の花 丁子草 楊梅の花

長春 九輪草 母子草 通草の花

二十九

犬櫻	東菊	春菊	馬蘭	櫻鯛	櫻貝	柳鮓	小鮎	八十八夜	山吹衣	春におくるも
金錢花	金鳳花	檜の花	若菰	上リ	鷹の巢	呼子鳥	櫻魚	わすれ霜	うらやまふき さくらかされ	春の限
茗荷竹	仙臺菰	小梅の花	五形	柳葉魚	郭公巢	雲に入鳥	爐塞	霜の名残 別れしも	三月尽	春深き
蘇枋の花	春蘭の花	木瓜の花	小米花	櫻うぐひ	鶯の巢	引殘鶴	火燧塞	つし衣	暮の春	春に隔る

春の溼ミナト ゆく春 春の名残 春過て

春を惜チシム 夏遠き 夏を待 夏を隣

夏 炎帝 祝融神 昊天 朱明 蒸砂

躡躑 仲呂 立夏節 小滿中 正陽 孟夏

四月 卯花月 花名殘月 鎮月

更衣カサ 一日白重卯の花衣カサ 背すたれ下ケ帯給締ぬき朔日より足

孟夏モウ 旬カシニ 一日天子より群臣へ扇をたたまふ

鍋祭といふ。江戸つくまの明神の氏子の女共枕かはしたる男の數同く鍋をかふり
渡る祭なり偽と云ツかふるきさを一ツかふればつふりにとち付てはなれすと
リ

灌佛クワンブツ 八日 佛生會 蓮花會 湯あみ佛
香水 俗佛佛のうぶ湯

筑摩祭ツクマ マツリ一日

百草を戦タカワク 勝負するなり 騎射キシヤ 五日右近の眞手つかひ装束の左近の眞手つかひ禰の尻を

引折着をひなり 水馬スイバ 五日水中を馬にて 梟車フシヤ 同船の運速を争ひたは

なり 印地打インヂウチ 賀茂の競馬ケイバ 五日くらへむまきほ

をせめて運速をくら 生玉流鏑馬イクタマヤササメ 五日ひ馬やぶさめ神主馬

住吉御田植ジキミタウキ 廿八日 山田御田植ヤマダミタウキ 同上

伊勢山川祭イセカミヤマツリ 八日 山田宮川にて毎年此日結をへ參詣三 おはらさし 丹後

謝郡眞律の原吉作の宮する 事をおはらさしといふなり 有無アリナシ の日 廿五日此日終日御例にて

も傳奏なくて不叶事あれは奏するなり かつて傳奏ありまたなしとのふりるなり 帷子カマヒラ 給帷子キタヒラ くれた

つじが花ツジガハナ 赤きかたびらにいふ 最勝サイショウ 講コウ 清涼殿セイリョウテン に行ル

祇園御興洗ギエンミキウセン 晦日夕 夏至シュウジ 五月の中なり 半夏ハンゲ 夏生ナツウマ 夏ナツ 至シ

十一日 五月雨イツムツスミ さみだれ さつきやみ 入梅イリウメ ついで 梅の雨

青梅アヲメ 梅ウメ つけ 虎トラ 加涙雨カナミアメ 廿八日

羽ぬけ鳥ハネヌケトリ 諸鳥毛シヨトリウモ をかゆるなり

蟻アリ 蚊カ のまつ毛マツウモ に巢ネ をくふむしなり

百合ユリ 鬼オニ ゆり 姫ヒメ ゆり さゆり ばかたゆり わのふゆり

田植タウキ 早ハヤ なへ 田タ うた 早ハヤ 乙女ニヨメ

早瓜ハヤウリ あさふり 白シロ ふり あさふり 干カ ふり

鏡醬草キョウシヤウソウ ずいものくさ 忘草ワシヤウソウ 花ハナ なり

末摘花スエトリハナ 紅ベニ の金銀花キンギンハナ 忍冬ニンジュウ

蝸牛カメノメ 火ヒ 串クシ さす 射シヤ 火ヒ 串クシ さす

照射テウシヤ さつを獨人ドコロヒト を云 ともしするほくしをまつまとおもへばや

入梅イリウメ 松マツ 播州姫路御城内ハクシュヒメジロミヤウヂノナカ に赤松アカマツ あり入梅イリウメ に成ナリ と悉シツ く枯カ

鶺鴒セセリ 川カハ 鶺鴒セセリ 舟フネ 鶺鴒セセリ 繩ヒモ 鶺鴒セセリ つかふ

黒鴨クロカモ 羽ハ のけ鴨カモ かの子コ かねの鴨カモ かねの子コ

鶺鴒セセリ 舌シタ を去サ れぬえの舌シタ のとかりを

麥刈ムギカシ 麥ムギ 粉コ 麥ムギ わら笛フエ

覆盆子フキチヤウ 木キ いちご 桑クワ いちご 蛇ヘビ いちご

紫陽草シヤウヤウソウ 四シ ひしの

忘草ワシヤウソウ 花ハナ なり 眞菰刈マキモカシ

標雪ヒラキユキ 見ミ 草クサ 萱蒲ウナハ 永トキ 永トキ 根ネ

鶺鴒セセリ 狩カカリ 夏山ナツヤマ の後ノチ みにかくれて鹿カ を取トル なり

ともしするほくしをまつまとおもへばや

皆青ミナアヲ く成ナリ なり

蒼木燒 サウ ジュウタク
濕をばらふ
ためなり

石菖 セキシヤウ
藻の花

夏菊 ナキク
藻刈

杞枇 キヒ
藻刈舟

若竹 ワケタケ
萍の花

天蓼 テンリョウ
菱の花

茄子 カシ
栗の花

刈葱 キニギ
茨の花

根芋 ネイモ
桐の花

茗草 メイコウ
つばす

青田 アヲタ
田草取

樵の木燒 サウノキヤク
蚊を追ふ
ためなり

天南星 テンナンセイ
南天の花

早松茸 サウソウタケ
むはらの花

早初茸 サウソウタケ
さまどりの花

生胡桃 ナマクワ
下野の花

青山椒 アヤマカ
びやうの柳

桑の實 サウノミ
五月つゝじ

花菖蒲 ハナシヤブ
花柘榴

朝露草 アサツキ
和布を刈

青小豆 アヲマメ
青さゝげ

粟蒔 アヲマキ
馬齒草

胡瓜 コウカ

繭 ユ

藜 アヲ

鮎 アヲ

杖花 サウナ

打花 ウチナ

黒はへ

六月

六月

六月

稗蒔 ヒョウマキ

拒蒔 コトマキ

蚊帳 モウザウ

水鏡 スイキョウ

水馬 スイバ

蟻螂生 アリロウセイ

水鳥の巢 スイトリノネ

尊 ツノ

白はへ

旦林鐘律 タンリンショウリツ

荏蒔 ジンマキ

玉簪 タマシヤク

合歡 カウカン

水鏡 スイキョウ

水鏡 スイキョウ

蛇衣脱 ヘビキヌヌゲ

鴨の浮巢 カモノウキネ

皂の薬 ソウノヤク

大暑中 オオシュウチュウ

水無月 スイナツキ

胡麻蒔 コウママキ

ろら豆引

あらめ刈

干鰯 カンイサ

鶯音を入

蟬の初夢 セミノハツユメ

蛆 ウジ

毛むし

夏瓜期 ナツウリキ

風待月 フウマツキ

鳴神月 常夏月 陽氷

賜氷節一日 氷の貢 氷室氷室の雪 氷餅祝同

一夜酒 麻地酒 醴粉酒 富士詣 一日ヨリふと壻難 精進

六月會天台宗祇園會 七日 御社より四條系柳の御旅所にて神輿を出し奉るなりしなくの餘出る十四日いろ

時の祭十五日にあり 御躰の御ト 十日 神祇官の主人 玉躰よ御ついで

召て奏するなり 津嶋祭 十四日舟祭夜にて桃打 勢田祭 十四日

嚴島祭十五日 竹生嶋祭日 十四日 博田祭十六日 江戸山王祭 十五日

御手洗詣 廿日ヨリ 鞍馬竹切日 伊勢祭禮 此日は 十六日

出家參詣するなり 愛宕千日詣 廿四日 大坂座廣祭 廿二日

賀茂水無月之能 廿日 橋立祭廿五日 住吉御稜廿日

唐崎祭 廿日 施米 廿日 東山北山西山などの山寺のたつきなき僧の 發願に米鹽等を禁中より給る

小蠅なす神 大星の節は悪鬼四方に飛めくる 大稜 廿日大稜川 川はらへ

夏はらへ 夕はらへ 夏ふしの稜 川社 夏稜 川邊の棚をかまへ 神をまつるなり

形代 川被に人の形を作り川へ 管貫具也 茅の輪 ちかや 輪をふしらへ入ふ 撫物 同

夏神樂 共いふ 鎮火祭 廿日ト部氏の行ひ 雷鳴の陳 雷聲三度なれば大将以下 近衛之次將迄弓箭を帶し

御殿の孫庇に候して 三伏 夏至の後 第三の庚の日を初伏 帝を守護し奉るなり 第四の庚を中伏といふ

立秋の初の庚未 涼 水鳥も涼しといへば夏なり 座頭涼 十九日

伏にて三伏なり 京四條の涼 七日ヨリ 川の中に床をならへ 糺の涼 十九日ヨリ

江戸兩國橋の涼 船ゆさん 屋形船 五月六日晝夜海上に群集す

嘉定錢 十六日 嵯我天皇潛龍の時宗の嘉定錢十六文を以て

嘉定錢 此日餅供を設く其例を用ひ 泉 泉殿 瀧殿 汗 汗手ぬくひ

簞 竹夫人 涼の具なり 泉 水閣 泉風 汗 あせ拭ひ

アツギ五明かほほり 雉尾扇 扇車
扇すまふ 扇引

唐うちわ
さらさ團 心太 とふる
てん

清水 汲むすふは夏なり
清水と斗は雑なり

楮の花 紙すき草
紙に成木ふり

夕顔 干ひやうむく
新りんひやう

鶯なでしふ 蓮
鶯なでしふ 蓮

蓮の實も夏なり 蓮
蓮の實も夏なり 蓮

射干 からす扇 蟬
うつつせみ 蟬

夏虫 身をふるすとは秋なり
火取虫とも云ふ

神鳴 雷初雷は春
六月鳴神月と云

青瓢 篋 ぶくべ百生干生ひきこ
やみの夜花も實も夏なり

土用干 虫干 虫拂 團 南部うちは

つくと井 井戸凌大星に
井戸をさらへるなり

麻 麻引青苧夏引糸
からむし新苧つくら麻

瓜 青桑瓜あわた瓜糸ふり
梵天瓜ひめ瓜水瓜

撫子の花 石竹とみなつの花
から撫子川原なでしふ

海松 みるみまつ 荒和布とつさか
みるみまつ 荒和布とつさか

ねり雲雀 毛をかふるなり

蠓 酒にわく虫なり 蠓 すくも
せうくといふ 蠓 すくも

夕立 白雨よだち 蒜根
かんたち 蒜根

南瓜 花も實も夏

江戸初鮭 六月十五日迄獲師網を下す
事停止なり十六日より取

せごし膾 大星の節魚あざれざるやうに
魚ほねともに料理するをいふなり

魚のあざるをいとは沖にて魚取と
そのまゝ料理陸へおくるをいふ

日野その外諸方より出る
町々絹市立新真綿 新絹糸出る

石尊 参詣の人木刀立を納る

綿の花 醤油造

葛の花 納豆造

菱の花 醬造

藺の刈 奈良漬

菅の刈 竹の皮拔

藍の刈 畫顔の花

夜鱒賣 炎天に沖より
沖膾 陸迄路次の間

上州新絹 六月
中旬

石尊 参奥の院 石尊大権現

極暑 六月廿八日相州大山不動

炎天 雲の峯

潺暑 ひとへ物

日盛 麻頭巾

日傘 麻羽織

温風 振舞水

風薫 水の粉

鯖釣 <small>ササノイ</small>	赤草 <small>アカクサ</small>	林檎 <small>リンゴ</small>	鷹羽 <small>トビノハ</small>	青鬼灯 <small>アヲキ</small>	干飯 <small>カンイ</small>	夏枯草 <small>アキコ</small>	青蕃椒 <small>アヲカ</small>	蒲の穂 <small>カマホ</small>	白麻刈 <small>シロアサ</small>
夏釣 <small>ナツツリ</small>	早桃 <small>サモモ</small>	澤瀉 <small>ササ</small>	杏子 <small>アンズ</small>	鳥鵜 <small>トリウ</small>	道明寺水 <small>ミチアキラ</small>	茗荷 <small>メイカ</small>	虎の尾花 <small>トラビシ</small>	つりかぬ草 <small>ツリカヌ</small>	麒麟草 <small>キリン</small>
夏果 <small>ナツノミ</small>	楊梅 <small>ヤマイ</small>	風蘭 <small>フウラン</small>	河ほね <small>カホネ</small>	煮冷 <small>ニシヤ</small>	洗鯉 <small>アヲヒス</small>	洗鱸 <small>アヲヒス</small>	水飯 <small>スイイ</small>	葛水 <small>クワスイ</small>	藿亂 <small>クワラン</small>
夏の限 <small>ナツノリミ</small>	眼皮 <small>ガンヒ</small>	凌霄 <small>レイソウ</small>	李 <small>リ</small>	驚草 <small>オドロク</small>	雲雀 <small>クモリ</small>	金龜 <small>カネカメ</small>	海月 <small>ウミツキ</small>	洗ひ飯 <small>アヲヒイ</small>	砂糖水 <small>サトウ</small>
									香薷散 <small>カクシユ</small>

秋を待 <small>アキヲマテ</small>	秋 <small>アキ</small>	少皞 <small>セウコウ</small>	帝 <small>テイ</small>	蓐叔 <small>ソウジツ</small>	神 <small>カミ</small>	爽 <small>スウ</small>	頼 <small>ライ</small>	旻天 <small>ミンテン</small>	白藏 <small>ハクザウ</small>
夏過 <small>ナツヲスグ</small>	秋を隣 <small>アキヲトナリ</small>	秋近 <small>アキチカ</small>	こぬ秋 <small>コヌアキ</small>	夷 <small>イ</small>	則律 <small>ソクリツ</small>	立秋 <small>アキノヒ</small>	節 <small>セツ</small>	孟秋 <small>マウシュウ</small>	桐秋 <small>トウシュウ</small>
七 <small>ナナ</small>	初秋 <small>ハツアキ</small>	首秋 <small>ウヅアキ</small>	明景 <small>メイケイ</small>	桐月 <small>トウグヱツ</small>	文月 <small>フミツキ</small>	蘭月 <small>ラングヱツ</small>	女郎花 <small>ニギハヤヒ</small>	花月 <small>ハナグヱツ</small>	
七夕 <small>ナナツ</small>	初秋 <small>ハツアキ</small>	首秋 <small>ウヅアキ</small>	明景 <small>メイケイ</small>	桐月 <small>トウグヱツ</small>	文月 <small>フミツキ</small>	蘭月 <small>ラングヱツ</small>	女郎花 <small>ニギハヤヒ</small>	花月 <small>ハナグヱツ</small>	
犬飼星 <small>イヌカイ</small>	初秋 <small>ハツアキ</small>	首秋 <small>ウヅアキ</small>	明景 <small>メイケイ</small>	桐月 <small>トウグヱツ</small>	文月 <small>フミツキ</small>	蘭月 <small>ラングヱツ</small>	女郎花 <small>ニギハヤヒ</small>	花月 <small>ハナグヱツ</small>	
あまの川 <small>アマノカハ</small>	初秋 <small>ハツアキ</small>	首秋 <small>ウヅアキ</small>	明景 <small>メイケイ</small>	桐月 <small>トウグヱツ</small>	文月 <small>フミツキ</small>	蘭月 <small>ラングヱツ</small>	女郎花 <small>ニギハヤヒ</small>	花月 <small>ハナグヱツ</small>	
かささぎの橋 <small>カササギノハシ</small>	初秋 <small>ハツアキ</small>	首秋 <small>ウヅアキ</small>	明景 <small>メイケイ</small>	桐月 <small>トウグヱツ</small>	文月 <small>フミツキ</small>	蘭月 <small>ラングヱツ</small>	女郎花 <small>ニギハヤヒ</small>	花月 <small>ハナグヱツ</small>	

乞巧奠 庭の立琴

七種の船 草花を以て船を飾り七夕へたむくるなり萩朝顔尾はな

七筒の池 葛の花女郎花藤はかま撫子ふれを秋の七草といふ

飛鳥井家七夕の鞠

池坊七夕の立花

荷前の使 天子より諸廟へ勅使立ふとなり

文珠會 八日 六道參九日 聖靈の迎鐘 同上

清水千日詣 十日 植買 六道參りの爲よて 調靈棚んかざる

孟蘭盆 盆せつき 諸寺施餓鬼 十五日より

向物品々 瓜の馬 茄子の牛 かけそうめん

青さいげ いがぐり 青柿 青梨 青桃 鼠尾草 栗穂 稗穂

瓜の馬 茄子の牛 かけそうめん

乞巧針 七孔の針よいるくの糸を通し手向る

御門跡籠花 草花にて

攝待 門ノ茶ともいふなり

逆の峰 往來の人にふるまふ

盆市 聖靈産聖靈竹

玉棚 根半 枝豆

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

手向坤

燈籠 きりみあげごうろ 花とごうろ 舞とごうろ
 送り火 鹿ヶ谷ハ 大文字 愛宕ハ 鳥井
 松ヶ岡ハ 妙法舟岡ハ 舟形
 日參詣堂は 燈籠踊 奥ドリ長谷
 女人禁製 燈籠踊 奥ドリ長谷
 題目 踊崎 中元 七月十五日
 盆のつと入 伊勢山田にて所々の家へ
 荷を持参して寶物共を望
 生身 靈 刺緒にて兩親を養ふ
 相模 くらべすまふ 關取 關脇 小結 寄
 かけおとり きとり おとり
 松坂おとり 音頭取 踊うた
 萩 ついれおきしたおき
 三井寺女詣 七月十五日
 經本流 七月十五日
 新綿の奏 十六日
 角力行 踊 小町おとり
 司土俵入 踊 いせおとり
 一葉 相の葉ふり
 もとあらの木萩 萩は一年ついにてかれ若はへより花吹なり此木萩は草萩に
 を生けて花吹もさあらは
 なる故もとあらの萩といふ
 つい有萩を以てめと木に
 するなり宮城野よあり
 アサカホ牽牛花
 萩朝顔
 籬萩 一株よ付百本
 槿花 ぼけの
 はな

櫛花は一日の榮ふり
薔は一時の榮なり

おとさへし。男郎花 おいとちの花

益母草。めはし。おみなへしに似て花白し

蘭。ふらはひま。仙翁花。紅梅

まんじゆさけ。しひと草。花赤し

ば秋。あらず。虫。鳴さか聲さかいほれば

雑。斗。は。葎。秋にあらす

蠶。田虫。蠶。つれさせ

秋の胡蝶。てふに露を結び

松虫。人まつ。虫。撰。くつはむしすむしむしむし狩

鳥屋出の鷹。鷹の分別。初鳥狩

おみなへし。おんなへし。女郎花

薬師。弟切草。薔の薬なり

桔梗。ありのひあをぎ

蓮の實。飛。蓮の實と斗

薬にすむ虫の音に鳴

秋の螢。結ぶ秋

秋津虫。赤さんぼう。やんま

秋風。律吹。船風。身しむ風

蠶。つれさせ

秋の螢。結ぶ秋

秋津虫。赤さんぼう。やんま

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

秋風。律吹。船風。身しむ風

鳩吹	早稲	初て涼	ひやしか	ぬる麥	木瓜の實	桃の實	黄柳	草の花	毘麻	はつた。
山鳩さらんとて手を合	ひろのはや早稲	残る暑	冷酒	あつ麥	鉈豆	犬子艸	芭蕉	水引草	焼米	垣豆
鳩の鳴まれをするなり	今朝の秋	青蕎麥	常山の花	くさきの虫	小車の花	茗荷の花	鬱金の花	やいと花	すまふ草	すまふ草
露うは露朝露夕露	新涼	冷麥	西瓜	番椒	柳散	桐	楸	花火	正花	正花
露の露	新涼	冷麥	西瓜	番椒	柳散	桐	楸	花火	正花	正花

槐花 エンジュノハナ

夕顔別當 ユウガノホヘツダウ

八月 ハチグヒ

絲瓜 ヘチマ

南呂律 ナニリョリツ

桂月 ケイグヱツ

秋風月 アキカゼグヱツ

觀音草 クワンオンサウ

茶調虫 チャテウムシ

白露節 ハクロセツ

竹春 タケハル

月見月 ツキミグヱツ

秋分中 アキブンナカ

仲秋 チュウアキ

葉月 エフグヱツ

壯月 サウグヱツ

雁來月 ガンライグヱツ

八朔 ハチツキ

繪行器綵雀 エウコウキササヅ

田面祝 タメンイハヒ

田實祝 タジツメイハヒ

天中節朔日 テンチュウセツツキ

秋社 アキヤ

堺天神祭 サカイテンジンサヒ

北野祭 キタノサヒ

白髭開帳 シラヒゲカキテ

放生會 ハツシヤウ

夜分なり ヨウブンナリ

阿野津八幡 アノツハチマタ

豊浦八幡祭 トヨウラハチマタサヒ

箱崎八幡祭 ハコザキハチマタサヒ

志賀八幡 シヤガハチマタ

槐花 エンジュノハナ

夕顔別當 ユウガノホヘツダウ

八月 ハチグヒ

絲瓜 ヘチマ

南呂律 ナニリョリツ

桂月 ケイグヱツ

秋風月 アキカゼグヱツ

觀音草 クワンオンサウ

茶調虫 チャテウムシ

白露節 ハクロセツ

竹春 タケハル

月見月 ツキミグヱツ

秋分中 アキブンナカ

仲秋 チュウアキ

葉月 エフグヱツ

壯月 サウグヱツ

雁來月 ガンライグヱツ

八朔 ハチツキ

繪行器綵雀 エウコウキササヅ

田面祝 タメンイハヒ

田實祝 タジツメイハヒ

天中節朔日 テンチュウセツツキ

秋社 アキヤ

堺天神祭 サカイテンジンサヒ

北野祭 キタノサヒ

白髭開帳 シラヒゲカキテ

放生會 ハツシヤウ

夜分なり ヨウブンナリ

阿野津八幡 アノツハチマタ

豊浦八幡祭 トヨウラハチマタサヒ

箱崎八幡祭 ハコザキハチマタサヒ

志賀八幡 シヤガハチマタ

深川八幡祭 フカガハチマタサヒ

板鼻八幡祭 イタナハチマタサヒ

西院祭 サイインサヒ

名月 ナツキ

駒牽 コマヒキ

龍田姫 リウテンヒメ

いなをふせ鳥 イナヲフセトリ

小鷹 コタカ

雀賊 スズク

山かへり鷹 ヤマカヘリトカ

死活杖の祭 シカクツヅマノサヒ

名月 ナツキ

駒牽 コマヒキ

龍田姫 リウテンヒメ

いなをふせ鳥 イナヲフセトリ

小鷹 コタカ

雀賊 スズク

山かへり鷹 ヤマカヘリトカ

死活杖の祭 シカクツヅマノサヒ

名月 ナツキ

駒牽 コマヒキ

龍田姫 リウテンヒメ

いなをふせ鳥 イナヲフセトリ

小鷹 コタカ

雀賊 スズク

山かへり鷹 ヤマカヘリトカ

鴈 かり金 かり音 ひしくひ 来る 鴈の使 鴈の文み 鴈書

巴鳥 山から ちから 四十雀 五十雀 日しろ ひよこり つぐみ

ひから しゃく ちから 鳥あつ鳥 烏 片う ちらう ちら籠

鶇 すすの草 すす 川原 ときのはね けきうば 鳴

小鳥 渡 朝鳥 鹿 かせき すがる なき 鹿の聲 鹿笛 鹿かり

鮭 初さけ はらみ 小鱈引 ひしおつくる

漣 鮎 落鮎 下築 くつれ築 うなぎ築

薄紅葉 蓼の錦 けたて 葛 眞くづ まいづ ぼら

しをに 紫苑 月の草 露草 花紫 たんざく

藍の花 紫苑 月の草 露草 花紫 たんざく

鴈來紅 葉鶏頭

茴香の實 くれのおも 瓜 玉つさ 錦文字

蒲萄 ぶどう棚 字治の花 園 草花也 非正花

稻乳 乳のふし 共いふ 稻を積たる 櫛 置たるをいふ 稻 いなはの浪

稲刈 稲ふく いれみのる いれの花 とみ草 いなふれ

入束穂 豊年のい 新米 米とし 秋の田 田を守 田の色付 田の毛見

二百十日 立春より 二百十日目 東呂子 東國にて

案山子 引板 そうす鳥をとし 木綿取 吹 芋 すいもから

菜種 大ふんたれまく からしまく 粟刈 種夕顔

種瓢箪 牡丹の分根 稗刈 種南瓜

草の色付 稷刈 種南瓜 とうやく引

岡崎祭 東山 十六日 木幡祭 廿六日 鹿谷祭 廿四日 逆髮祭 廿四日

北山祭 廿六日 鳴瀧祭 廿八日 津村祭 廿七日 國

天王寺 一條會 十四日 太秦祭 廿日 小倉祭 十五日

八幡花の頭 廿日 天満 鏑 流馬 廿五日 大坂

吳服祭 十八日 津國池 波利祭 高辻 室町

野々宮の別れ 九月十六日 桂川の御稜

度會新嘗會 九月十六日 禮使 勅使立なり 夜分也

伊勢御遷宮 十六日 廿一年目御社立替ル 禮幣使ナテ勅使立

神田明神祭 十五日 日蓮御難の餅 十三日 同上

住吉の市 十三日 住吉の相撲 菊 菊合 目精 更生 濡鷲

後の月 十三夜 粟名月 二夜月 豆名月 月のなみり

六より菊 醉楊妃 羊歡 回寮 女郎 周盈 菊金目貫 白菊 黄菊 紅菊 袋菊

残る菊 十日の菊 承和菊 黄菊なり 残菊は十日の菊なり 承和年中より

とふへそめしかり 又そかひといふあり 作り菊にあらす生したるまい 瘦たる菊ふりそかひとは筋遠と書なりまかりくねりたる枝に咲を俗に曾我菊といふ

矢をむすひても秋なり 色くつるとしても秋 楓 色見草 紅葉の 雲ても秋あり

名木散 びても秋なり 楓 雲ても秋あり

柚 びても秋なり 柿 木さほし づるし柿

御所柿 五所柿とも云 似たり 御守殿とも云 和州巨勢と云所より

栗 いくりの粉餅 くり飯 さいくり 椎 ぬしは 菌 椎たけ 抜たけ

平茸 初茸 柳たけ 鼠たけ 天狗たけ ト治

黄蜀葵の花 紙すき草 漆取 くらし 蘆の穂 あしの

茶々興祭 京童部路中町々にて小さきお興をふしらへかつき貫船のちやくふしかたらしふんけんちやふしくとはやすよし

住吉の神送 三十日 九月尽 暮秋

秋過て くれの秋 秋より後 行秋

秋過る 秋の名残 秋あしむ 冬隣

冬 顛頊帝 玄冥神 律檀 上天 元英

羽音

十月 應鐘律 立冬節 小雪中 孟冬 折木

初冬 玄帝 秦正 上冬 始氷

方冬 新冬 小春 亥冬 早冬

かみれ月 無陽の月 しくれ月

初霜月

神無月 伊井冊尊神あかりまし／＼陽なき月を無月といふ今諸神出雲の大社へうつりたまひ出雲にては神あり月と云世事通用よまかせおく

神集津田の神 冬を守 神なり 神の旅 神送一日 神の留主

宇津田の餅 初亥の日 亥は子を多くもち無事なるゆゑ子孫繁榮にあらへてふとふくあり 神立 風風なり

進爐炭 唐の式なり 焦糟喰 同上 下元 十五日をいふふり

興福寺法華會 六日 東福寺開山忌 十六日

法勝寺大乘會 廿八日 金毘羅祭 十一日

達摩忌 五日 十夜の念佛 日より十五日まで浄土宗行にてふ記主上人より始る

維摩忌 十日 日蓮御影講 法花宗 十三日 御取越祖師

親鸞上人の忌日十一月廿八日本願寺にて大法事あり末寺井在家は十月へとり六し勝手次第法事をつとむる

雷 玉あられ

氷柱 銀竹

とりにふるしむなり

ふ露はエラと

みぞれ酒 あられ酒

寒晒米

水仙 銀盞

雪の下

餅 鱧

おしへ草 若鷹 鷹犬 鷹枝 經緒 鷹匠 列卒

雪 吹ゆきを風

寒 苦鳥

杜夫魚

藥喰

鮒煮凝

冬至梅

胡蘿葡萄引

凍

馬車

氷 露氷ル冬なり氷かたけるも冬

鳥の羽見えず飢へて己が羽をくひつくしはだか

鯨 船の舌をさへつりとい

玉子酒

湯豆腐

風呂吹大根

葱 ねふか

石茶

つめたき 鷹 大たか 兄鷹 弟鷹 隼 鷹場 追鳥狩

退羽打

ぬす立鳥 諸鳥鷹にあふて

鷹妹狩 女鷹を戀

憂左毛 尻のさまり毛なり

足をおたいめ夜あけての小鳥をはなしそのとりの

飛たるかたへ終日ゆかすさぞ

だ或ば竹の枝につくるをいふ也

う是に仍て鷹の鳥とは雄

子をいふふり

療 たく火をいふ

から神諷ふ 早歌

諸たすき 葛 是等皆手に

さるものゆへさり物歌といふ

鳥さ

偷立ト書ナリ

羽ならしの鷹

屋形尾 鷹の尾の

ぬくめ鳥

鷹

里神樂

神樂

採物歌

大前張

ひ ふれたる鷹を

ちから草の鷹

雌か雄かの勢を羽をふ

鷹寒夜に小鳥をさらへ

て足よにぎり夜すがら

鳥 柴 鷹野の小鳥を

禁中の外の神樂は

皆里のぐらさいふ

神遊ひの

採物歌 太刀弓

なにはうた

井奈野 わきもふ

小前張 あけまき いそら きりくす 星 さざりいふ
なり駒右神樂歌みふ冬よふるなり 御火焼 俗にはたげさいふ諸國のふ
十一月 御火焼 いふ立職人ふまつるなり
八日 新玉津島 御火焼 十一月十二日

三島西の市 伊豆 十一月中西 宇賀祭 廿日 山神祭 同上

日吉臨時時 中ノ西 賀茂臨時祭 北ノ祭

東三條御神樂 下ノ卯 大原野祭 子ノ宗像祭 上卯

山科祭 上巳 平野祭 上申 春日祭 上申 松本祭 中卯

當麻祭 中卯 卒川祭 上酉 梅宮祭 上卯 當宗祭 上卯

中山祭 上卯 松尾祭 同上 吉田祭 中申 日吉祭 同上

園韓神樂 中丑 右十八所祭禮數度あり旬に依て季を定むへし其時節々の季を入れてむすぶへし

十二月 大呂律 小寒節 大寒中 殷正 季冬

抄冬 師走 臘月 除月 臘月
弟月 殘冬 三冬月 梅初月 春待月
弟子の祝ふ日なり 關東ハ八日、上方ハ十三日 臘八 八日

乙子の朔日 祝ふ日なり 川浸餅 朔日 臘八

温糴粥 臘八のいふ 事始 關東ハ八日、上方ハ十三日 着駄の政

御髮上 下ノ午日 天子のおぐしけづりの 佛名 十九日ヨリ 廿一日マデ

天智天皇御國忌 三日 佛名 十九日ヨリ 廿一日マデ

かつけ綿 天子ヨリ佛名の導師にたまふ 師走 さばむかし諸家に佛名をおふな

権梨乃勸盃 津の國なしの御酒を禁中へたてまつる 寂勝寺灌頂 大寒の日禁中四方の門に陰陽師おれを立ル也

大徳寺開山忌 廿二日 寒念佛

寒聲すりふ 寒曝 餅搗 寒和 田鯉

餅花	黄鰻	鶉巢くふ	早梅
早咲梅	庭鳥つるむ	探梅	早咲椿
寒造酒	臘梅	室咲梅	孟宗竹
早椿	室咲椿	寒竹ノ子	年忘
歳暮市	年取物買	煤拂	煤掃
古札納	星佛賣	年木樵	節季候
寶船賣	正月の飾物皆賣買とすれば冬		
曆の末	古ふよみ まきはてる	弓矢羽子板賣買	
節分	立春の前 日なり	吉田の大稜節分	
内侍所の御神樂	節分 之夜	厄おとし豆打	
柀指	鰯頭指	厄はらひ	

大原雜候寐節分の夜大原さふ堂へ男女 追儼鬼やふの聲

衣配れにわたす小晦日 前日なり大晦魂祭 祭りするなり今七月玉まつ

齋宮の繪馬大晦日の夜 門松をいとなむ

和布刈之神事長門の國はやとも大明神 毎年大晦日の夜寅の刻に至りて漫々たる

大海うしほ四方へわかれ屏風を立しふとく海底平々たり神主たいまつればはごふ

鎌を持半町ばかり岩間をつたひ海底の和布を刈取神前へ備へたてまつればはごふ

く海の面沙みちてもとのごとく荒海とふるなり

○雜之詞

二季を争句ハ雜也 花紅葉 寒暑ト結句

飛花落葉ト續ル句 又四時不斷ある物は雜也

松竹の落葉 米 麥 豆 松の緑等

無名の虫 鳴ハ 小鳥 秋渡ハ 終冬花ハ 桂秋實ハ 村雨
 津夏茂ルハ 蓇葖花ハ 藻夏花ハ 虹初虹 蓬生 榭 蛤
 淺芽原 蘆若葉ハ 夏枯ハ 菅 眞蔣 旱 梅染 玉虫
 豕雲 清水夏結ハ 梅干 蓼虫 夏鳴ハ 梅染 鹽物
 鷺 山鳥 都鳥 鮒 鯖 鰯 鴨の羽盛
 鷓鴣 野鷹 離鷹 離鳥 鳴扇 禮扇
 梅壺 桐壺 藤壺 鳴香 舞扇 布
 搗栗 軍配團 戸の鳴子 蜘蛛 鮒 鮒 布
 布曝

追加

右大概記之余準可知而已

池上千部 長榮山本門寺 毎年三月十九日ヨリ 廿八日マデ

九品佛千部 武州世田ヶ谷領奥村 九品山淨眞寺 毎年四月三日ヨリ 十二日マデ
 海苔日待 毎年三月の内一日品川浦へ海苔おびたしくよする日あり
 り六のとき品川中日まちはす是を海苔日まちといふなり

天 大圓云 碧落上 虚空上 半天 月 異名月の部に委く出す
 日 金鳥 陽鳥 火輪 靈耀 星 北斗 北辰 大白星 客星 朱 琉
 旭 長光 斜陽 夕榮 流星 南斗 斗柄 旋頭星 參星
 七曜 二十八宿 牽牛 織女 各星之分也 日蝕 月蝕 天川
 異名七夕の所に委しく出す
 銀河 七夕の時は水邊よあらず秋又名所水邊に成 雑七夕にかま
 ほかの天豫 銀浪 はす河内國あまのかわさ云名所あり 銀河七夕に面を嫌ふ
 には二句去

雲 霞 虹 運氣 蜃氣樓 電 雜なり 稻 妻也 秋
 ○聳物 品かはりて樂よ二句去二句つゝく

遊糸陽炎ヤウイン 月の暈カサ 富士の烟ケラリ 淺間の煙アサマ

松竹柳草木雨等の炬霧キリは聳物降物ツバク兩用也

雨アメ雪ユキ霜シロ時雨トキメ吹雪フユキ露ツユ雲クモ電アサレ霖ナガアン

白雨コシダチ雪ユキしけき

○神祇シキ三句去三句つゞく一句にても捨ル

伊勢大神宮日本六十余州 宮ミヤ社シヤ壇ダン遷宮セウキウ 三寸ミサキ

長官チヤウケン社頭シヤトウ祭禮サイレイ洗米センマイ御師ミシ 拜殿ハイテン

祝言イハヒ嗣ホコラ散米サンマイ神主カミヌシ瑞垣ミツカキ斗帳トヤウ御供ミツケ

神カミ禰宜ニギハヤヒ玉垣タマカキ神託カミツケ初穂ハツホ社人シヤヒト稜ハラヒ

千木チキ湯立ユダテ神興カミキヨウ乙女ヲトメ鯉木カッホキ幣ヘイ氏神ウヂガミ

神馬カミウマ神子カミコ鳥居トリイ鎮守チンシユ賢シユ繪馬エウマ禰ニハヤ

巫尊ホウリクニ天子ミコトノ小忌衣コシヨロモ神樂カミガク太々神樂タカカミガク命祖ミコトノ

木綿キヌ襪ソク御手洗ミテシヨ水ミヅ膳テウ也ヤ神供カミツケ花ハナ七五三シチゴサン鵜羽ウヘ菅スガ

齊院サイイン賀茂カモ御手洗ミテシヨ水ミヅ忌竹イミタケ指ササ矢大臣ヤシ叩首ウツカサ

神宿カミヤド宮ミヤ小前張コサマエ星川ホシガハ御杖ミツサ管貫クワンクワンのノ形カタ代トコロ神文カミフミ

神樂カミガク阿知女アチメ採物歌ツクモノウタ里神樂サトカミガク起キ請コト紙シひヒ神文カミフミ

おばらオハラさしサシありアリ丹後タタリかカうウくクしシ也ヤ伊勢講イセノコト太々講タカカミノコト

○非神祇ヒカミ男山ヲトヤマ放生川ホウシヤウカハ龍宮リウキウ橋ハシ

惠方エホウ年徳トシノトク精進シヤウジン佐保姫サホヒメ龍田姫リウテンヒメ

山姫ヤマヒメ○釋教シヤクキヤウ一句にても捨ル

七十五

諸佛の名 諸菩薩の名 佛祖の名 羅漢の名
 諸山号院号寺 諸上人 諸子 諸名 諸佛具
 精舍堂 題目 庫裏 僧正 數珠 長老 伽藍 念佛 舍利
 塔和讚 拂子 上人 諸の官名 諸宗 佛具 談義 藍佛 和尙
 諸僧法衣 諸僧都 法問 諸佛 諸佛經の 經
 木魚 化義 獨僧 都 法問 諸佛 諸佛經の 經
 能化義 獨僧 都 法問 諸佛 諸佛經の 經
 帽子 輪論 獨僧 都 法問 諸佛 諸佛經の 經
 主座 輪論 獨僧 都 法問 諸佛 諸佛經の 經
 袈裟 禪藏 獨僧 都 法問 諸佛 諸佛經の 經
 坊衆 徒僧 禪入 定 厨出 家 鉢 客殿 燕尾 化衣 諸佛經の 經
 尼五戒 悟道 行堂 灌頂 眠藏 經 和尙 舍利

血脈 足 花座 持戒 生飯 花曼 頓寫 諷誦
 引導 塔婆 花座 持戒 生飯 花曼 頓寫 諷誦
 鉢開 抹香 回向 卵塔 因果 六道 彼岸 地獄
 功徳 非時 齊 流轉 迎雲 來迎 極樂
 曼陀羅 作摩生 結伽 陀落 須彌座
 三界 六道 薦僧 虛無僧 是八釋二二句去
 碩學 坊主 落等 釋の詞 釋になりては 鐘書記
 醫者の釋名 諸職人の釋名 法印 法橋等
 ○兩部 一句つゞく一句にても捨ル

帝釋天 辨才天 多聞天 持國天 增長天
 廣目天 聖天 大墨天 毘沙門天 摩利支天
 如此天と呼ぶ神 山伏 蘇民將來ソミンセライ兜巾トキン襪掛スノカク
 此外も兩部 金剛杖コンゴウツエウツエ槍笠ヒカサ槍杖ヒツエ 梓神子
 神佛にてつゝきたる句 兩部なり
 立願 通夜 ● 雨皮形箱 月待 日待 庚申待
 戀 夫 妹 計 客氣 玉章 惚 婦 詢
 女房 二道 妹 脊 娘 情 媒 薄情 形身
 姿鏡 仇 奴 契 内儀 二心 紅脂 嫁
 恨妻 腰元 門立 口 紅 妬 妾
 花奴 難面 瓜 紅 孕 占 女 花 簪 待 佗
 ○戀之詞 但當時の点取には五句迄つゞく一句にては不捨
 二句去三句より五句迄つゞく二句去二句つゞくにて免す

白粉 誓 文 誦 入 簪 袖 引 化 粧 思
 縁 忍 密 夫 伊 達 新 枕 儂 帳 懸
 傾城 心中 長 枕 幃 下 焦 遊 女 神 祈
 手枕 耻 叫 戲 女 下 焦 枕 香 口 說
 白人 十 話 枕 繪 踊 子 出 合 宿 口 說
 振袖 野 郎 口 舌 流 目 色 狂 袖 留
 陰間 尻 目 吸 物 怪 忘 入 舞 子 水 祝 離 別 金 剛
 指櫛 尻 目 吸 物 怪 忘 入 舞 子 水 祝 離 別 金 剛
 忘らる 尻 目 吸 物 怪 忘 入 舞 子 水 祝 離 別 金 剛
 妓有 灰 占 兼 言 目 元 の 塩 念 者 辻 君
 若衆 牽 頭 兼 言 目 元 の 塩 念 者 辻 君

立名 前髪 前わたり 惣縁 陸言 婀娜
 戀慕 近まさり 夜這 指切 腕突 入ほくろ
 身を焦揚屋 髪切 股突 密通 若後家
 後添湯女 白拍子 結ふの神 女街
 千束の文 諸國傾城町の名 人目の關
 人目忍ふ 手をしめる 目くはせ 尻つめる
 子をあろす 仇くらへ 下紐解 身たしなみ
 寐乱髪 垣間見 垣をのぞくをいふ
 錦木 二尺ばかりの木の色々にさいしき
 狹と云字なりむれあいか 緞帶 女のはらみたるさき
 朝をいふふよめり 細布 けふの細布とて幅の
 ふなり 空炷 留きやう但きやうとばかりては 衣々 後朝 あふたる翌
 うつり香は戀にあらず

虫の印 貞女は落す不貞女はおちるさなり

○非戀詞

髮所縁 奥様 櫛 三縁 鏡 枕 乙女
 中居 歎 宿執 夢 帶 半婢 乳母 泪
 千詐 偽 御家 下女 御局 天乙女
 早乙女 替女 市女 賤女 學の文 旅の文
 佛日月星を祈る句 輝

右の分戀よ非といへとも句により戀よ成へし

○無常之詞

鳥邊野 仇し野 劔の山 三途川 魂結ひ
 死人 灰寄 葬頭 河原 白骨 鬮 骸 冥途

龕極樂中陰忌中周忌幽靈人魂

○述懷之詞 拾 二句去一句にても

追善追悼 寡白髮三輪組 眉の霜 佗病人 世を捨

○非述懷詞

愚賤山賤座頭替女柴戸尉翁

○人倫之詞 二句去二句つゞく 一句よても捨ル

祖父父兄姉我息子娘姪祖母

母弟妹妻子女房伯父姑 舅夫親彦獨從弟伯母姪姑 聖賢の名 實名 俗名 僧法師の名 傾城白拍子野郎の名 此外準してしるべし

○非人倫之詞

帝皇女本院新院仙洞太子宮 新王門跡大君仙人人間一門凡夫 眷属二人三人 大勢 雜兵 衆生 典藥 外科本道老若 鍼醫 入道 百姓 旦那 敵かたき目付留主居奉行身某私

地頭 門主 橋守 門守 花守 山姫 寒山
 捨得 僧坊の宦名 釋祖師の名 俗宦名
 苗字 守の子 師 經師 佛師 繪師 鑄物師
 者 功者 使者 醫者 佛者 是等也
 非人倫一右の外數多なるもの畧之

家屋 宿 菴 軒 書院 廊下 寮 圍
 亭 樓 庇 椽 小家 博風 爐 壁 窓
 床 礎 塀 鴨居 棟 薨 闕 閼
 梁 隣 天井 座 鋪 閨 玄關 部 屋
 ○居所之詞 三句去三句つゞく 一句よてもすつる
 余は准ししるへし

本居所に打越嫌ふ

○居所用
 村里 筑山 坪の内 泉水 路次 疊 戸
 外面 井戸 井筒 脊戸 簾 障子 鉤簾
 翠簾 暖簾 土藏 欄干 町 但道のり何町などは
 庭 居所なから 余は准ししるべし
 柱 古書に非居所といへども居所に用るあり
 杖柱橋柱などは居所にあらず

○非居所詞

内裡 皇居 御所 非居所 神社 佛閣
 所 千里 邊土 市場 軍場 鞠場 等也
 山 嶽 岨 岫 谷 峠 高根 坂
 ○山類之詞 三句去三句つゞく 一句にても捨ル

蠟燭 短檠 手燭 假寐 居眠 夜着 燈明
 送火 衣々 深更 化物 幽靈 夜發 辻君
 夜多 嫁 蚊 幌 草の 枕 衛士の 燒火 星をこなふ
 册入 住吉の 市 實の市 枕 星月夜 非分夜 追儼
 除夜 大晦日 共にいふ 星月夜 非分夜 追儼

○非夜分詞

鐘 泊 電 礎 虫の 聲 三日月 出 蘆火
 今日 朝の 月 明 はなれ 常燈 晝の 月
 暮の 月 夢現 夢幻 夕月夜 有明入 殘月

○食類之詞

余はこれに准ししるべし

喰物 ト 飲物 ト 品替りて 二句去二句つゞく
 一句にても捨ル

○旅牀之詞

門出 餞別 乘掛 輕尻 蒲團 張 駄 賃
 木賃 跡附 本陳 旅籠屋 出女 駄 賃
 泊女 泊取 川留

○生類之詞

虫ト 鳥ト 獸ト 獸ト 獸ト 同生類三句去
 二句つゞく一句よても捨ル
 品かはりては二句去何れも
 三句はつゞかず

○植物之詞

木ト 木ト 草ト 草ト 竹ト 木ト 同うへもの三句去
 一句にてもすてる
 品かはりては二句去
 いつれも三句はつゞかず

不高不低植物

木にも草にも竹にも
二句去三句はつゞかず

藤フジ

萩ハギ

槿ムクゲ

茨ハナ

荊ナト

薔ツツジ

葡萄ブドウ

薔ヒナ

牡丹ボタン

枸杞クキ

山吹ヤマブキ

卯花ウサハナ

五加木ゴカキ

○書牀之詞

二句去二句つゞかず
一句にて捨ル

文字モノ

のノ

書シヨ

籍シヤク

文モン

臺ダイ

繪エ

草紙ソウシ

筆フデ

硯スズリ

墨スミ

頓トシヤ

夏書カキ

手習テナラヒ

朱引シユヒキ

席書セキシ

硯スズリ

席書セキシ

狀ガヤク

手紙テガミ

文モン

玉章タマシラ

烟ケブリ

煤スエ

灯トモシロ

爐ロ

巨燧コタツ

火鉢ヒバチ

炭スミ

竈等カマド

○火鉢之詞

二句去二句つゞかず

○風牀之詞

二句去二句つゞかず

風鈴フウゼイ

扇アウギ

團吹ウツハ

蘆アシ

の聲ノコエ

そよく等なり

余は准ししるべし

藥クソリ

灸キツ

鍼ハリ

入湯ニラトウ

按摩アンマ

醫者等也

余は准ししるべし

○器財キザイ 器財付てもくるしからずといへども

武具ブク

家具カグ

鐵物テツモノ

硯スズリ

墨スミ

文臺モンダイ

如此同類は二句去二句つゞかず

○支牀シテイ 支牀付てもくるしからずといへども

顔カホ

首カビ

目メ

鼻ハナ

口クチ

耳ミミ

腮アゴ

如此同類は二句去二句つゞかず

顔カホ

手テ

足アシ

爪ツメ

腹ハラ

脊中セナカ

如此はりては付ても打ふしても苦からず

同國同所
伊勢陸奥

○名所ニ名所付やうの事品あり名所に名所并國名所
樂に見ゆる所を付べし
國をへだて付べし
但如此國をへだて付べし
富士山は何國名所にも付べし
同字の事也

須磨

象瀉

色 つけづ二句去
色 つけづ二句去
色 つけづ二句去

如此訓音かはりては皆二句去也

(イ)今

幾

出入

(ロ)花

早

晴

果

張

(ホ)外

程

(ハ)邊

經

所

遠

問

共

止

通

取

解

路

近

(ニ)我

(チ)

置

多

音

思

折

替

(ワ)

通

忘

渡

割

侘

川

風

替

通

掛

兼

販

(ヨ)吉

夜

(タ)立

爲

絶

(ソ)袖

外

其

初

(ツ)遣

着

付

就

話

次

音

中

鳴

無

波

並

成

雙

(ナ)出

無

上

憂

請

並

打

浦

野

上

内

雲

草

迄

來

頓

(ム)出

山

(シ)内

又

木

迄

廻

(ヤ)頓

遣

深

(マ)待

聲

迄

迄

小

(フ)事

振

吹

(コ)心

比

又

迄

餘

(サ)事

(ア)有

明

下

合

相

迄

水

際

聞

消

指

下

小

更

身

木

當

先

(ユ)行

(ヒ)日

路

道

引(モ)本物持(ス)住末捨過濟

○同字別陰

御酒ニ御 田鶴ニ田 太夫ニ大 志賀ニ賀 仙臺ニ臺
 代官ニ代 關白ニ關 南無ニ無 防風ニ防 傘ニ唐
 一ニ二 度ニ度 半天ニ夜半 筑紫ニ紫 輕重ニ重
 代物ニ月代 由來ニ由來 行ニ行 撫子花ニ撫子 春日ニ春日
 戰ニ戰 戰 中風ニ中 中 人の目ニ秤の目 けふニ今日
 一町目ニ天目 如此の類也但シ此外にも文字の出所により別吟に

○付字之事

家ト家ト折をきらうといへども 家土産 家標 家の子 おの
 付字といふにて 家の字 三句去 朝朝日山 星星比目

神ニ神子

呼ニ呼子鳥

乾ニ乾鮭

雲

雲見草

蘭ニ蘭奢待

雞卵ニ雞頭花

紅ニ紅

黒ニ黒蠻奴

如此品かわりても文字の出所によりて別吟にあらず

○賦物之事

祖師貞徳諸門葉へ申置れしは賦物の事連歌に深き
 謂有事なるを近來俳諧になそくのとく戯れ事に
 成行侯端作りはたどへ花の會ならば花俳諧之連歌
 ま九月の發句ならば月俳諧之連歌何よても其席の
 品を右之趣に認め可被申候予流には賦物取心から
 ザと正保三年丙戌三月十五日於花咲亭に定らるゝ之
 然れども世上に有來る事なれば取様左にしるす

面白うもて遊ひけり花眞壺といふ發句のとき

眞の字取へからず（鉢ある文字をとれといふふきなり）壺といふ字を取時に

何皿と取べからずとは花皿壺皿兩通するを嫌ふ故

梅何取べからず（梅壺と通ひ訓言なきを嫌ふも）

へなり 蛸何取べし（蛸壺と通ひて兩通なし）

何上置時（上賦といふ） 下何置時（下賦といふ）

一字露顯（香蚊取） 二字反音（養蚤取）

三字反音（砧狸取） 三字中零（狐杵取）

除扁（添扁） 借音（等は文字取也）

余は古書に委しければ略之

〇月の部

月（秋也） 百員（七） 但シ面ニ一ツ宛也 月（月） 五句去

月次（彌生）の月の字（三句去） 音ニテハ二句去 月（日） 星（互ニ越を嫌）

月（彌生） 不嫌（きさらぎ） 月次（彌生）の月（夜更着） 月次（彌生）の月（トハ）

五月雨（いづれの月）にても不嫌 月代（口影）二句去

月（夜）の字結ふ句（折を去なり） 戀神釋名所等結ふ句（右同）

月（姨捨）又更科（トハ）付べからずおば捨更しな（月）は付て苦からず

月（同道具）付べからずたとへは月に露と付て又露（つ）ける事を

嫌ふ 春の月（春の三日月） 春の有明 春（季）

以上四也折去夏冬同斷 但し他の委なく一巻秋ばかりにてもよし

心の月（胸）の月 月次（彌生）の月 眞如（シニ）の月 月草

寺號 山號 付字（ニテモ） 秋（影）の夜（分）分（光）分（照）分（結）分（面）分（月）分（成）

余は句段によりいかほども有へし

○非正花二分

花のぼうし本名標帽子ハカタボウシ也 花田帯同上 つしが花赤き帷子花を云なり

花丁子ラウジ 湯の花 花野草花也 花檀同上 糝の花カワシ

火花トモシビ 灯の花丁子頭 茶のはなが端なり鉾ふり

浪の花 雪の花 染色のはな色藍の色 はな紙鼻紙

はなかわ馬の鼻皮なり 花子の狂言キヤウケン 花町の親王ハナマチ

花園クハ 花頂山トウサン 花川戸如此氏苗字人名官名

花王ボタン 花の富貴同上 花の隠逸イカク

花の兄ムメ 花の君子ハス 花の宰相サイヤウ 荷シヤクヤク

六の花ネギ 雪ユキ 睡れる花カイロウ 海棠カイドウ すくき花ユウガホ 夕顔ユウガン

三の花スミ 霜スミ 末摘花スエトクハ 紅花ベニバナ 花ハナ かつみマユモ 眞菰マコモ

四ひらの花アサギ 紫陽草アサギ 花がら紅ベニの壳カラなり 銭の異名イミヤウあり

いろは寄手爾於葉

最イいとやんとなき此類替りて いと淋しいとあもしろき

折去いいはけあき無の字 いとけなき不嫌

いつさい出さま入さまなり いまのあしろ池の面なり

いさら川雨後に細流 いはぬいろ山吹をいふ

いをやす寝るをいふ 不知しらざ いざさそふ

ろうせらあざける ばかり七句去 留り折去

はつかわづかなり はなじはづかしき 事なり

はらから一 さまやうだい折

はやしのかね一

林鐘

六月なり 蟬の聲なり

はまゆふ一 紙を重たるごとく

はきにあ

な一 すすくり

はなかつみ一 薦の花なり

にて

留り一 三句去

に留り一 三句去

下の句一 只一句

濁かなでトでばトば等也

にけなし一 二にやはさる

にのま一 ち二町ト云

ほのト一 一 ほのか一 ほのめく一 互三折去

ほがらく一 小袖をいふ

べた一 端ふり

海べた一 海ばた

べ一 衣類三句去

ときめく一 時にあたる

とまれかくまれ一 ともあれかく

鳥かなくあづま一 鶏しのいめ

ちりひち一 尾をいふ

ちかまさり一 ちかいで見れば

ちはやふる一 古ト云枕詞なり

りうた一 秋なり

りこん草一 蓼をいふ ねらん一 七句去 留りは一 折 ねらし一 同断

ねかづく一 佛神禮拜 ねすた一 二句去 つ鳥一 盗立ト書

るらん一 二句去 留りは一 折 る一 二句去 おはん一 二句去 ふの一 付句

おひらく一 只花の事なり 樂一 不嫌 およす一 けをいふ

おもてぶ一 せ二貌二伏二面去 おもを一 ことし一 事ふり

おどろ一 ときなり を一 のかじ一 二トまんする

おほよそ一 鳥一 いらすを おひら一 一 六さなり

おほ一 一 禁中のとほ わふ一 といふ 詞一 倍なりうき

わら一 一 おふりの われ一 かのをしき一 疑なり

目すれ一 草一 萱草を わく一 一 倍敷事なり

か一 三句去 加一 二句 我か誰が一 不嫌 から一 一 神く

かはたれ時朝三句去 かいま見垣より 垣二句去

かたうつら一羽飛鴉 かるもかく藻にあらす猪の

かわほり一なり たらうして漸々と云 加きのとう一柿にあらす

よすか一たより 便血去 よぼろ一人の 仕丁折去

よみぢ一めいと よこそりふせる山一中山

よんのおと一天子の たどる一たどりく 折去尋まかふ

玉出の峰一すみよし れり去二句 留りは折 妻もふもれり等なり

れんめん云詞一なる つた三句 連綿と書なり

ろト云てには二句去 そトぞ二句去 そのかみ一むかしの

そト云詞三十四十六等 互々折去 ろよぐ木二 草二折去 風鉢あり

ろのあかつき一尺散の時は そろ川一添水ト書 秋なり

つらし去七句 留りは折 つらん二句 ついれさせ一きりくす

つく鳥の國一をいふ つくもかみ一 髪折去 老二句去

つらふてには二句去 留りは一なり つくしりうたふ一そいるに

つと留り下の句一上の句つと留

ねおろし根わたし一風鉢なり ねちけ人一倭人の 二句去

ならん七句去 留りは折 なれなる等二句去

なよひ一やわらかによわき なめげ一不禮ふる

なづ一なれむつま な一此てよは三あり ちぎりきふ一降さうな

すな等一成の字なり なおのひぞ一花散な等 下知のふなり

らん二句去 留りは面去 らしらめ一同断

らしらん二互々 らる七句去 留りは折 らん二句去

らうたしうつくし

むべさありといふ詞

むさとび

うらうら淋し

うない男女十二三

うたかた泡といはん

うけえのろふ

うつくし品かへて

のろし戦場の烟なり

くものふるまひ待人来る時

らうとういとをしみ

むくつけき情なき

むやくの關

等なり浦

うない小松を

うつし心

うれたきうらさ

のみ此てには

くれ云詞

くれは鳥綾織女なり

へきなり

やらどいふ詞

やらで七句去

やよ云てには

やまくちしるき

またきなり

まらうと客人の

まきもく大和の

ますほのす

けり去

けぞし給ふ

けくれなくなり

二句去

留りは

折

やまあいの袖

まし二句去

まゆね

まに

けらし去

けるけめ

けいめい

心二句

留りは

折

やまあいの袖

まし二句去

まゆね

まに

けらし去

けるけめ

けいめい

心二句

折去

同断

山に生ル

留りは

戀しる

まに

けらし去

けるけめ

けいめい

心二句

下知の詞去二句

花さけ雨ふれ等なり

ふすみの床猪のふし

猪折去

ふしころも服なり

ふしみづ伍倍子水なり

ふかうのさと仙境なり

ふりさけ見る見渡したる

戀し床し等現在のし

うそ二句去

留りは面去

えにし縁邊宿縁

えくつむ若葉

えんねたみ

て留り去三句

下の句で留只一なり

てふ云詞

あ

あらし詞

あらし詞

あな詞

あな詞

あな詞

あかの水尺散なり

きらん去七句

留りは折去

さし云詞

さし云詞

留りは折去

二句去

され云詞

春され秋され等

さかしらさんけん

ぬれきぬ折去

さしも云詞

蓬面去

一切衆生ト書

さすら事なり

き二句

あかりき

きび若き事なり

きぬ戀の別

ゆふは夕日のか

ゆた浪にた

ゆふだみ

夕すみ人神樂歌

ゆすい

め二句

留りは折

めるめ

め二句

めく云詞

めさし持簡なり

めかれ目もは

めかる時

み二句去

寒み等等

みてぐら

三ッかな七句 づらめけらしらるゝぬらん此類皆 七句去なり
 して二句 するせんせて互にし留り二句 句中有ても二句
 しまき雪を吹立る しほなしぬ海水邊あり 近江に有
 しとしにぬれ留雪につよく しばなく鳥鳥の數く 鳴をいふなり
 ゑしかお香の道具なり 衛士類と書 ひさかた雪をいふ 久方ト書
 ひどの日正月七日あり 八日ト書 ひきいれゑほし 親を云
 ひちて水に ひもろ神のにゑあり 腊と書 ひたふるひたす
 もなし七句 留りは折 はなし同断 もせ云詞一野もせ
 もしほ草一筆のあとを ものゑんじ物れた
 せられ七句 留りは折 せらる同断 せな一夫の事を
 せし二句 せり二句 する二句 して二句 去

すらん七句 留りは折 すあり同断
 する二句 せてしてせし互に ず二句 ぬ不嫌
 すらいふ詞句 留りは折 十だて二事あり
 ずし歌ふをいふ すすび二慰二愛 品々口傳
 すすめ七句 すすみぬ等五句 單編獨等三句
 一文字面去 訓音替り七句 三の字ヨリ 十の字テ
 二文字面去 訓音替り七句 三の字ヨリ 十の字テ
 二の字ト同断 百千万各折去 訓音替り面去
 春字季 四季各同断
 戀の字四折去 非戀戀の字面去
 月七五句 月次の月の字三句

花 四句去

花の字 五句去

残る花 春 残雪 春

残氷 春

残る螢

残る蚊

夏ふり 夜より朝へ

残る菊

秋 九月十日の菊をいふ

残暑 秋

初雪残

淡雪残

霜の残

皆冬ふり

歌 音

和歌分

連歌

俳偈

風雅

歌嶋の道 各面去

詩 發句

短冊

色紙

小うた

田うた

催問樂うた 各面去

伊勢の國

いせ曆

いせ海老

いせ鯉

いせ物語

いせ鳥

いせすり

躰

此格式六十六國各同斷あり

折去

東西南北

此四字訓一音一

折去 但

方角かばれば付ても打越ても不嫌

鳥の聲

く

七句去 鳥の聲

等之

鳴も

音も

同斷

虫の聲

く

鳴も

音も

鳥の式同斷

鷹

鷹匠

鷹犬

皆冬ふり

鷹の巢

朝鷹

泊り鷹

白尾春

時鷹

毛をかふる

羽遣

習ふ夏

小鷹

初鷹

荒鷹

山別れ

鷹の鳥屋

野鷹

はなれ鷹冬

貞

富

四季

鶯

や

鹿相

な家

もたつ

ねら

なれ

常盤木

に

秋を

塗け

り

蔦

紅葉

か

じけて

や

野馬

のわ

そる

雪の

三物

貞

逸

里

淋し

山は

振ふ

紅葉

狩

月

の

客

一

拳

づ

く

の

す

鳥

は

皆

墨

繪

夕かすみ

文

佐

哉 や ど か よ めり たり けり
 さぞ たそ たれ ころ なに かは) いく
 いさ いざ かも そも けれ らし らめ
 らん 見ん せん けん いづれ いかに
 いかい いづゑ さぞな かしな ならし
 けらし もなし あり へ 畢のぬ花さきぬ雨ふりぬ等々
 下知舞へ聞聞け等々 現在のし青し等なり
 未来のし花咲へし雨ふるへし等々

二字切

折る人は花に恨「ん風」もなし

三字切

「いかに寐て「何いふ事」ぞ星の中

三段切 三名切

女帯男の衣裳うつらの尾

大廻し

手に乗せて富士の雪見る遠眼鏡

を廻し

青くてもあるへきものをどうからし

立妙切

窓白し雪や障子を張つらん

此外切字なくて切るゝ句あり師傳なくてはすべからず

切字にならざる分

ふのぬ咲かぬ散ちぬ等々 過去のし散し等々 ある なく
たる ぬる なる ける

此類ひ皆切字にならずとしるべし

哉之部

苗代の馬にひかる、男哉 貞雨
めきくこ木魚の汗るわかば哉阿州芳雨
立よれば扇が谷も暑さかふ 米一隣
長崎は唐し船の落葉哉 全 同
乞食も日陰へ廻る暑さ哉 全 其山
白雨に濡ても跡の暑さ哉 藤里
しばらくは富士も降止ふ暑さ哉 其木

や之部

早わらひや握ればさうく掌 上州フナ岡乙牛
初雪やいよく酒にふりすまし 全 蘆遊
人の親笠をもととや花曇 全
一霞瀧のわきれや水のおと 全 桐直遊
春雪や竹に曲らぬ神恵 全 孤遊
陽炎やひさから烟る濡佛 上六原 珊木
糸竹や秋の哀れの聞所 八ノタ山 船ト

行水を遊て廻るはたるかふ 吏山

落る葉の音にかちける時雨哉 石州ツツ 蘆雲

湯治駕戻りは花の歩行路哉 万国

夏山は海の底まで青葉かふ 娛流

子を思ふ闇に来て見る踊哉 五出

隠居へも仕事賦りの落葉哉 巴山

魚舟の片帆照行してくれかふ 可色

水際へ一寸足らぬ柳かふ 柳風

隣へも二筋三すち落葉かふ 京水鳥山

曇もの山はくもらぬさくらかふ風光

人の打手を見て打た踊かふ 掌花

目振間に松見失ふ霞かふ 伴水

朝顔やその日くの歌まくら 全 文竹

一八や二八にまさる花すかた 全 竹遊

散かゝる幕のたるみや櫻川 青井 松旦

寄算や本町筋の小夜時雨 全 古之

鶯や寐顔かへて井戸の端 全 笠雨

夕立や力まかせに牛の尻 全

献立よおほつかふしや茸狩 阿保村 山

色かへぬ山に模様や渡り鳥 小林村 里

古郷へは廿日歸やけしの花 新宮子 子男

鶯や谷から春を觸流し ヨコカ 松雨

名月や尾花の疵も見へに鳧 小ツシ 文歌

立秋や木々も錦の糸支度 長根 文賀

年寄の肩もかるきに紙子哉 小池氏 松童
 品玉のせはしき中へ落葉かふ 風車
 練いるゝさろろさく迄牡丹哉 蘆角
 鬼百合は名を恨ての姿かふ 翠路
 大名の目にも小春の入日かふ 百猿
 沙日哉一日海に酒の酔 蓮舟
 一葉にて淋しからざる柳かふ 木山舎 秋空
 花盛直打はふらぬ日の出哉 女 錦秋
 大名の農具は菊の手柄哉 御庭
 日向漕舟に勝手の暑かふ 泗漚
 たつた今ありつる人も霞哉 延山

梅か香や隣から来る風の底 馬庭 関山
 つゝみ行霞やふぼす鐘の聲 岩井 琴山
 憎からぬ女の酔や百合の花 淵柳
 七夕や風を取つく笹の音 西平井 悦山
 名月や沖にちいさき海士小船 蘆英
 起くの梅の匂ひや磨砂 倉ガ 午雞
 梅咲や千鳥の聲は古ふふり 全文
 盆棚や有しにかわる瓜の果 イセ崎 彩柳
 惣領の腹ふもりもや室の梅 花鱗
 乞食の果や霜夜のきりくす 池鯉鮒
 烟出しや木の葉の船の鳴戸越 盛賀
 消跡に簪目やある花の雪 市寶

兼好に家は真似ても暑哉 上州七田市 釣浦
 二ツ三ツ瀧へ碎けるほたる哉 全八ハタ 更齒
 一群は菊にあらしの野馬哉 九鼻
 峯の梅風に香のある麓かふ 全イイマン 杉雪
 新しき直路を行は櫻かふ 扇風
 風立て目にもろく落葉哉 全シメ 松露
 落葉よて落葉を埋む深山哉 イセ崎 蘆洲
 淋しさは最早濃なる紅葉かふ 専秀
 柳さへ急度乱れぬ暑さ哉 全三川 田葉
 寐猫の耳も蝶の眠り哉 全イカホ 盛山
 色くの風を嗅たる花野かふ 全高サキ 時文
 初音哉噂の中へほこぎす 胡統

傘の實はへや捨ふ茸かり シハ 透竹
 心よりひくうも飛や羽抜鳥 小ガタ 魯洲
 名月や箱根の湖に遊ひけり 蘆葉
 茸狩や似合ぬ衆徒の腕まくり 芳州
 蒲公や澤邊につたふ瀧の音 永州
 夕顔やあるかふきかの留をんか 齊州
 降ふから笹に氷るや夜の雨 東州
 松虫や月棚の闇に晝の聲 羊州
 菊畑や千種の宮を詩百篇 客應
 茸狩や戀をばふれて松に風 文子
 茶の花や嘶ひさつて冬に成 蘆魚
 涼しさを配るや橋の袂より 斗醉

しら菊の影みる水の匂ひ哉
 ほうられて燕の戻る柳かふ
 はつかつゝ流れてもさる柳哉
 枝川の曲た形よくぬなかふ
 また火鉢尋れ出さるゝ蚊遣哉
 蓮の花見るうち斗暑かふ
 憎からて蓮の葉に乗る蛙哉
 行末の海へはおしき清水哉
 白雨に半分にふる暑かふ
 あぶられし風に意地ふき櫻哉
 四五日とつゝに思ふさくら哉
 吸筒にふふりを好む瓢かふ

全 享松
 全 好時
 武州永竹 山 螢
 全 山 色
 八ヶ岳山 呂 竹
 全 好 竹
 全 原 月
 新宿丁 蘆 月
 全 喜水改 曉 山
 全 蘭 思
 全 柳 糸
 上野色 泉 志

筒から橋の趣向やかきつばた
 稻妻の忍ひ所や峯の松
 藪入や田舎も御所を染て出る
 白たきの浮世ふぶりや八文字
 草むらにそゝけぬ宮や女郎
 燕やうれ矢の通る細小路
 夕立や笠を着て喰ふ船の食
 初秋や世に捨られぬ薄袴
 早乙女や日毎くの旅出立
 戦くにも水のふるるや軒あやめ
 相傘の時雨めうしや下屋敷
 敷島の道照る月や手提灯

全 四方寺 蘆 鴨
 ナガ竹 山 螢
 竹本 山 童
 上野ッルリ 新 石
 江州 近 山
 隠後大ノタ 里 風
 石州ッラ 素 兄
 全 蘆 洲
 全 羨 鳥
 エシロ高サキ 主 原
 チノ父野止 月 峯
 上郷

御手洗の一はい曇さくら哉
 迷子の衾に咆る案山子哉
 あやめふく軒に螢の舎り哉
 入相にふしを付たる野分哉
 時くは扇の動く晝寐哉
 涼かな隣の舟へ膳をすへ
 もぎさうは花表斗の野分哉
 舞の爲に嬉しき曇哉
 今舞ふた蜻蛉化したる紅葉哉
 花を見てまた雪の日の櫻かな
 瀧潜るからくれふいと哉
 一葉つゞ紅葉撰行野分哉

四ノ 管 竹
 全 一 桐
 黒熊 雷 昌
 宇賀 川 龍
 全 可 水
 上小ケムラ 山 笑
 日野印地 蘆 元
 ノ上 泰 山
 ヤ田 芦 睡
 寺井 松 甫
 全 岸 松

月や日やつもる矢種の年の暮
 入相をのがれや今朝や姥さくら三
 匂ひふかき雪とやいはん山櫻
 群かりて涙を酔する螢かな
 新月や古ひの付は人よ寄
 寐そびれた夜の力や杜鵑
 初雪や藪で葺ぬか今恨み
 葉櫻や風の吹には氣も付す
 三勝や唇のおぼふ二日月
 名月や何磯くさき小蓋
 初雪や下枝迄は行足らず
 雪解をむすふ出雲や初時雨

南部モリ岡 白 翁
 千代見坂 蘆 舟
 クシ崎氏 虎 山
 金谷トウ 友 里
 酒倉 万 壺
 友 之
 素 石
 其 潮
 吏 山
 千 翠
 富 旭

顔撫て懐へ入る落葉かな
 吹度に入日のくゞる薄かな
 階をかそへて下がる霞わな
 寒垢離の川端迄は厚着哉
 空無沙汰掃せて置て落葉哉
 水と遠く水にしたしき柳哉
 若葉して谷へは落ぬ筈哉
 枝川の聲も落合ふ千鳥哉
 松斗あまして置て枯野哉
 寐覚ては又れせらるゝ衛哉
 降た程今朝はくいたつ野未哉
 はやり行ふしなも餘所に田歌哉

全 松川
 全 保水
 全 初交
 全 笠雨
 西平井 周盈
 馬庭 里川
 行井 淵水
 撫川 笠栗
 全 笠川
 下大塚 梅里
 フ子岡 且山
 全 山慰

夕立や繪も及ぬ瀧の音
 吹は織池の落葉や錦の待
 初雪や大門口もかくれ里
 足柄や雲よりうへの薄氷
 七夕の糸に繫や稻びかり
 六うしの蚊帳のあやしや杜鵑
 折からの雨や難てる奥座敷
 朝顔の咲やいつもの証敲
 百姓の余情にするやひつち稻
 堅塗に手餅つかすや糸柳
 取逃す蚤の命や長廊下
 川筋や闇を姿の友千鳥

渡牛
 連午
 貞陸
 紅岩ホウ 蘆玉
 里鶴
 倫路
 蒼柳
 龍子
 牒之
 院爾
 二調
 青鳩

瀧の音は包殘してこくれかな
 曇その名にさへ花の手柄哉
 淨瑠璃へ扇はかしても涼かな
 あたる内斗火燧は寒さかな
 野を山を己か世磨き雲雀哉
 汐先のまくり寄たる千鳥哉

全 用和
 全 東川
 武シウ熊谷 蘆碩
 全 友至
 全 文至
 上フヂチカ 貞宿

雨の日や鴉のとまる幟竿
 朝顔の取付立や五月雨
 振袖も猫も狂ふや土用干
 初かつは寒よも呼や蜀魂
 心よき風の姿やふとし竹
 葬や人の命も露の内
 手に提る世の灯やけふの菊
 隠れ家へ紙子届きて行秋や
 豊年の案山子の弓に弦もなし
 關子に布子ほどよし後の月

交免
 風車
 其月
 其桃
 左木
 杜平
 米甫
 貞雨
 芳雪
 吉井 松庭

松影もちり／＼暑し蟬の聲

宇賀 艶山

玉味曾の木曾も又よし郭公

橘 果

秋深し鼠の通ふ枕もと

吉井 笠雨

苔から最うめかれせし菊の花

好 榮

引鶴の足路強し和歌の浦

小ハダ 重友

なかりけり

深澤 松岸

氷る夜の枕に淋し水車

堺町 竹雨

鐘遠し雪の日に果なかりけり

舍 牛

おく霜に石白白し桔槔

安下 東里

梅の風闇に恨はなかりけり

三宅 蘆夕

朝毎の願ひも涼し手水水

活計トウ 鶏歌

雲閉て扇の風もふかり見

三宅 蘆夕

鶯に前後なし藪の襖

友之

あり

三宅 蘆夕

風にいよく高し三輪の森

ナガシハラ 蘆魚

尻聲は山彦よりありほとゝぎす

モノ井ウツ 玄蟻巷

新田に久を付けりかんふ鳥

フヂナカ 湖雲

行水もまた外に有けふの月

フヂナカ 万壺

行舟の帆は洩れけり横霞

吉井 復兒

一斤の雪に聲あり夕千鳥

フヂナカ 扇志

こそ

復兒

隠すえて来る客も有十三夜

アソウ 嵐睡

とりとめて見れば嘘あれ萩の花山桴

フヂノ 和周

たり

有法は手心にみそ傘の雪

和周

穴山はすまして居たり秋の月

タカサキ 湖青

涼しさの欲ふを起れ池の端

吉井 松月

ばや

未はいさ紅葉連行谷の水

ハマン山 秀竹

星合の文よ出ばや橋の一字

五子ザン 習谷

はね字

秀竹

吹て来る木の葉は何所の時雨やら

吉井 松石

菊を聞ん頃に越路の梅の花

小ハダ 秋空

また

梟の聲さおもはん望の月

ミヤザキ 幸成

明日はまた暑い浮世を涼船

小ハダ 素牛

つ

幸成

玉はみを又引戻すつは蓋

高サキ 河月

落て行葉を見届つ霜の期

イセサキ 芳柳

ぞ

狂気とも見えつ降行村時雨

全 有隣

咲花にひそりかましぞ柴鷄頭

ハマン山 東宇

柏から菴へしらせつ小夜時雨

ハマン山 原翠

燕の何にぬるぞ汐干瀧

乙 山

畫顏の垣結さしつ一トいひき 高サキ 呼雪

菅笠を舟に忘れつ夕すゞみ フカサキ 里鶴

一ト月は寺がら暮つ高燈籠 吉井 笠考

よ

眩笠はおほららしさよ花の雨 高サキ 山貴

もし誰も来か出て見よ秋の暮 シメダ 而醒

今頃の傾城馳よ虎が雨 マヘダシ 壽保

切字おもてになき句

紫の合ぬ水にもかきつばた 大ハハラ 良雨

繁昌さ菊も都も九重に マヘダシ 蘆魚

散て来て佐の、渡りを花の下 チノ父 豊東

炭甕のけふり盡して初霞

か

己が身をつめりて鳴か蟋蟀 延 山

流るゝか落るか螢水鏡 春 旦

二の聲は扱は木神か郭公 イセサキ 繁柳

也

秋風のなふり物なり種ふくへ タカサキ 當屋

僧正の落馬も可なり女郎花 牛 羅

牟ぬ

春來ぬさ目にはさやかよ古小袖 クワシマ 延山

源平も和睦となりぬ立甲 竹 倭

下知

朝顔も笑へ嫁人の後の顔 ヨチサハ 伐柯

紙漉のしつ心なき初しぐれ

乗物は釣らせた斗衣更 乙女 紀搦

鰯口の緒を雀のたくる春の雨 鳥屋 里水

やふとなき手へすりふ木も寶引 ツギガ 陰夕

只ならぬ木履の行衛若菜有 全 山至

春の名をけふは忘れて初時雨 フガチカ 貞宿

今はむかし嵐雪は

彦兵衛予は平助と

云し時其角かもとよ

して蒲團ひさつに

寒夜を凌しに

酬の和ふたりはあし

芳野人送れ櫻に風の神 小ハヤ 其朝

万物の道あるか中に

との葉の道深き事を

わきまへさる

とを憎む

貞樹

蓬萊や

人のくらはぬ

柿の核

己を楽しむものは

慈愛を忘るゝと

いふふとを

跡さして火燵に

寐たも

夢なれや

夢中庵

笠翁

四季

佐野

沈流齋
杜川

船の灯の 人聲ゆかし瀧月

一掬ひ月も手にある清水哉

管絃囀鳴るに血筋や出来西瓜

そよりさも松は沙汰ふし夜の雪

全

忍路や 闇の梅が香 暗部山

吳周

猿曳の 猿にも義理の 袷哉

猫の子の

戀する親に

囀れ

け季

全

ふきませて是も錦か馬場の春 一徳

椎の木や 猪牙も追れて行登

風はいさ 豆腐の白に 秋の音

大名の火にくはつたる火燵哉

全

石燈籠釣上そうな 柳かな

上ウイハ井
貞笠

一さはら 夏の静類 夕部哉

其原や 畔のまに〜 月そ宵

筭にさすか 氷柱を 雪婦

全

早乙女は跡へあゆむに 汐干哉 貞國

子を抱て 人の静や 門すゝみ

似た事は瓜ふたとへて 後の月

底倉に 役者もひとり 落葉かふ

全

口明て 蛤眠る 汐干かな 蘆邑

帷子の 節句の空や 水あさき

眞白な 花から 出たり 蕃椒

張立て 障子も 寒し 冬籠

峯の雪 白く別れて 紅葉哉

傘借りて 邪魔は 嘘つく 時雨哉

全

きのふ 寒けふは 雪こそ 山櫻 石之

夜を 晝に 何岸の 師走を 初鯉

稻妻の 縫そふ 松の木の間 哉

船頭の 晝寐を ゆする 千鳥哉

全

雲に入 人もあり 鳧 遠千瀧 蘆管

帷子を 吹や 幟の やま嵐

目は 空に 折〜 寒し 後の月

年の暮 自由に 遣ふ 金海鼠哉

全

伊勢ふらは七十五兩飾竹

上州フナ岡 貞川

蝙蝠やしほく雨の古社

親持て居かもしらす盆女郎

追分の淋しき方や霜柱

全

春雨や柏はかりは風の音

貞隣

關の戸の燈は消えて杜觸

秋の暮立出見ても寐て見ても

黒み行空はいつふの時雨哉

全

川音へ釣すへりし花の山

上州下大塚 周賀

全

北山の雪はきたふし初櫻

フナチカ 貞陸

散られては蝶飛上るけしの花

一つ更行秋やさうからし

行違ふ女の寝き枯野かな

全

夜櫻や一ト羽鷄のうかれ聲

上州小ハタ 貞州

吉原は水に淋しき涼かな

ふしかたの不孝恥し玉祭

ひともしや石にからまる下河原

全

行春を引延してや藤の花

全フナチカ 蘆夕

箕着たる振袖もあり田植唄

稻つまのさつと見せたる花野哉

沙予へも舟てわたりぬ川一瀬

全

袖入ぬ山の手柄や花曇

上州フナチカ 蘆波

淋しさを配て行やかんぶ鳥

鈴虫の聲さへかれぬ後の月

馬士の唄風よ消行く枯野哉

全

櫻哉群つゝ女飛鳥山

南窓亭 蘆相

白雨や茶船のかゝる橋柱

夕日影松へ柏や蔦かつら

全

青柳はそのまゝ春の姿なり

南見庵 蘆寛

草木の葉裏みせたる暑哉

秋更て鳴子の繩もちぎれ鳥

初雪や常見ぬ山も新しき

全

散らぬ日はしつ心あり山さくら邑山

上州ハヤシ山

伊勢にては何といふらん藁粽

紅葉する草もふけれと秋の海

降をとば竹敷ばかり吹雪哉

全

白くと曉きよし蓮の花

淋しさを芭蕉のはたへ茅の軒

初雪や常見ぬ山も新しき

散らぬ日はしつ心あり山さくら邑山

伊勢にては何といふらん藁粽

紅葉する草もふけれと秋の海

降をとば竹敷ばかり吹雪哉

青柳はそのまゝ春の姿なり

草木の葉裏みせたる暑哉

秋更て鳴子の繩もちぎれ鳥

初雪や常見ぬ山も新しき

散らぬ日はしつ心あり山さくら邑山

伊勢にては何といふらん藁粽

紅葉する草もふけれと秋の海

降をとば竹敷ばかり吹雪哉

青柳はそのまゝ春の姿なり

草木の葉裏みせたる暑哉

秋更て鳴子の繩もちぎれ鳥

船引に俗せて立や、村千鳥

全

お逢著と見よ響らる、花見哉 阿州 魚 千

暑さへ氷ていくや、雪の峯

虫の音に、木草鎮る、月夜哉

雪の日や、憎い鴉に、手一合

三物

青くても紅葉と詠な紅葉哉 拾花甫 貞 里

入日は山よ月は海邊に

若君の御屑へとまる、饅頭

全

おもしろう散れさも惜む落葉哉

全

酔い事しほし忘れて梅の花 貞 玉

樓へ尻を見せたる田植かな

朝顔の盛を星の別れ哉

初雪や、疊の上へ、一つまみ

三物

いつさ入さぬかふふほると片折戸 一祖堂 蘆北吹 蘆長

野分よそれる鞠の行す衛

夜を晝へ、繼宵から照添て

全

蚊堀はまた忘る、夜あり杜鰯 波 光

兼酒は癖に成て涼しい

水閣の月に君子の貌を帯て

全

花あれば會坐にうつるや夢畑 上州八まん山 桐 船

待なれる長樂鉄を頼杖

永き日に茶人は心を和らけて

全

けふ斗下戸ならぬうそ桃の酒 全 蘆 雁

胡葱腫乳母かかいとり

鶯のなまらぬふしを響られて

全

呵られる橋を忘れて後の月 貞 竹

新酒の酔の顔を吹せる

一瓶の手際紅葉の山見へて

全

隠家のいと、淋しや霞雀 上州八まん山 松 花

垣のもやうにからむ夕顔

琴の曲に舌の廻らぬ名の有て

全

山霧のほくれ初てや朝の月 全 弘 百

鈴つけ馬にたまる鈴虫

水茶屋の秋は住居をふり遣て

全

草花よ曲りの残る初あらし 全 蘆笙

休んだ笠の軒に蜻蛉

月を待趣向爐路よも箒して

全

卯花や暮てもくれぬ夕景色 シホヘイ 松關

窓に立添ふ夏の湯揚

沖の船手に取やうに棹さして

全

二人来てひとりには飲ぬ新茶哉 全カキ井 桐榮

塙筈にはやくしるゝ入梅

てがくと窓へ夕日の筋違ひ

舟を漕葛西の女やおとふへし 蘆魚

櫛笄の先へとんほう

名月の猷立足らず市へ出て

歌僊

見渡しの頃日かはる青田哉 風志

兼て居る牛の角に初蟬 貞山

窄いと、待人に興ありて 常仙

歌仙

二ツ三ツ聞か熟味の蛙哉 友里

欺冬寒き階の雪 蘆管

離れ家も夏を隣の支度して 蘆邑

ふたつに折は鼻紙の常 有佐

浄瑠璃も洲濱よほらせ池の月 貞屋

茶の約束も朝顔の翌 執筆

霧分てかほそい僧の袈沙右光 貞山

世にも名高き笛の一人 風志

おもふ事てうと現にまきらかし有佐

かふさる貌の泪落けり 常仙

日盛の猫はへたりと綿よ成 貞屋

柏が下は音からか風 貞山

川魚の骨おそろしや宇治の里 風志

百斗なる婆の継物 有佐

もさゆひも銀も鉛も雪の月 常仙

鎗珍らしく村の子が寄 貞國

風呂吹に吹れて月も氷るらん 蘆管

笑へと斗狂歌下され 友里

振向は忠盛殿へ能通し 貞國

女のしらぬ銀の指引 蘆邑

手拭を天窓へ置いて十更る 友里

行脚の尻の牛に草刈 蘆管

雪の峯人をたげよつき上る 蘆邑

柳もだみて藝者出拂 貞國

母親の氣を養ふ箒取 貞管

窓をはねると大谷の墓 友里

村しくれ乞食の菰のさえ渡り 貞國

松は常盤の部屋持に逢	貞屋	勘定なしに鳥指の道	蘆邑
すかだ花院家捌きの塔の下	有佐	月花のつかはしめなり樽拾ひ	友堅
月代かゆく春風そふく	貞山	霞の深い才か古郷	蘆管
余 國結の心ひろがる爛生空	風志	學寮の軒にも蝶の浮氣者	蘆邑
二人匍匐ふ琵琶形の石	常仙	土器町へ翦て行風中	貞國
雨遠き鎮守の繪馬へ蟻の道	貞屋	つくくさ見る程永き春の暮	蘆管
先立出て鯉置をさせ	有佐	憂に絶ぬは山歸來なり	友里
深川も思ひまはせば波の奥	貞山	誰夢の果か覺たる文枕	貞國
結了の影も共に姿鏡	風志	波西行もむかしおかしき	蘆邑
ちやんと鳴鈴を聞てもなひかぬ常仙	常仙	水結ふ亭主かてには心太	友里
身て韓紙を明る飼猿	貞屋	何處をあてとに馬は放る	蘆管
埃溜にあればさて何古かるた	有佐	御奉行の梅花幹蜀名に立て	蘆邑

鹽を借り合堅田千軒	常仙	六日の月の弦 <small>ユミ</small> になり初	貞國
月の名にその土地く風の風か有風志	風志	桐の葉と組て落たる響虫	蘆管
味にあつかふ埤の甍	貞山	雨の千破天の案山子流る	友里
青醒た若衆の提しめら花	貞屋	骨柳食のむせあんばいも旅ふれや貞國	貞國
今しらぬ不斷筒袖	有佐	遠くも飛すまめふ蝙蝠	蘆邑
我儘も見遣されたる花となり	常仙	軒端や紙漉の灯の影細き	友里
次第に景の睨る印籠	風志	酒て納る疱瘡の神	蘆管
草の戸に御駕とまるも花の道	貞山	花さかり乗りぬ恨に伊勢曆	蘆邑
辨當へくむ春の瀧さの	貞屋	ふちやついでに道のあかるき貞國	貞國
歌仙			
水仙の又そいのかす茶杓哉	一徳	松の色青にかへり明の月	貞川
料理の伊達を釣す鮫鱈	蘆翁	跡に續て翠よふる鷹	貞賀
歌仙			
上州藤岡連			

ほし物の雨臺所へ持込て

角力を習ふ小調布の意地

さなきだに渡しせばしき暮の月

野分の埃の棚臺來る

窓^ウかけにふくれ鳧向ふ腰

溝はた除る酒の魂

やんはりさ赤前垂の口車

風にあまる御油の移香

ふやきその歌思ひ出す野雪隠

風そよよ〜さ花をふそくる

物見から手にさるやうな舞雲雀

春しやく〜のかるた組寄

一 徳翁

一 徳翁

一 徳翁

一 徳翁

一 徳翁

一 徳翁

一 徳翁

一 徳翁

一 徳翁

一 徳翁

一 徳翁

一 徳翁

百性の茶の間も俵出來秋よ

井戸迄汐のたす所あり

つき替て竹輿の吐し新しき

鰯を嗅て通すむく犬

縁日にすり合傘の延あかり

舟の烟を橋へ漕ぐむ

借座敷なぐさみ料理またるくも

嬉し文は口で封切る

朝寐した禿をふるふ夜着の裾

げた〜と笑ひ呵られて立

椽先に陣皮のけふる月涼し

酔た心はふんの大名

貞 陸

貞 隣

貞 宿

西 湖

貞 笠

湖 雲

湖 遊

湖 遊

山 琿

霍 山

東 川

後家とのに尼と俗との間を行

釋教の部に入ッたばた餅

探幽の筆勢を出る峯の月

秋ても風のかほる人込

壁土の封強て踊の曲かひつむ

ゑくぼは顔の道具かりけり

川竹のむかし語を入ほくる

黙茶の鹽も飽る鼻雨

べん〜さ出船の順風を待兼る

星の氣色も晦日の雲

世渡のてにはおもしろき唄念佛

碓搦ふ京の米搗

馬好の端綱をかりて牽て見る

日は高けれど泊鎌倉

浦風にめけぬ色あり花盛り

笹の中から鶯の聲

春雨に一枚握りはさまりて

肥立男は母の献立

縫物よ邪摩する猫をか愛かり

師走も廿日通し船宿

つやきによれば障子へ函兩

飛上るほさ伊勢へ被たい

内袖の木綿合羽はぬるつふき

役者評議で歸る掛乞

且 山

周 賀

蘆 夕

文 里

蘆 遊

貞 陸

湖 雲

貞 宿

西 湖

鶴 山

東 川

蘆 汶

浴衣よは一階上をかつき染 蘆翁

蚤に家かほれ水に繪を畫

明月よ悟そふふい羽か生へ

圍爐裏取まゝしけの日の蟹 一徳

おもふさま泣もて歸る梓弓

時を心によめす雨

手の判をつゝみかゝけるお合宿 蘆翁

しらふよ成て戀はふすふる 一徳

秋くさい七ツ下りの花の山 蘆翁

晋柱はつしてかゝと果鳥

歌仙 上州岩井連

夜と共に葉裏へしらむ螢哉 貞笠

石壁を二階へ仕舞ふ物好し 周賀

寄麗な雪に別れきたふい 貞川

伊達に着てちらりと寒し三十日月貞隣

御供揃ひの喉く柏子木 湖遊

打水よむら雨乾く高砂子 山埜

獅子に神代の残る角兵衛 蘆夕

下月と見へ三腰差たは頼もしい文里

尋る家を臆で教へる 且山

心して牛をも繋ぐ市の花 貞賀

長閑空に鶴のまどわり 貞笠

歌仙

切賣りの廻り道する花野哉 貞鶴

帷子さわる醒醒の肌 貞山

丸合羽裏から見れば不自由に 好和

壘所にて荷を附て出る 松山

三か月の影の碎ける管簾 里川

律のしらへの低へ熊篋 執筆

秋草の笠敷形に窪み見 淵水

仕直す帯の端を持せる 里水

かつくりと船着時に夢は覺 松島

蠅むく町のなまくさく吹 里鶴

能道に水履をならす笛自慢 琴山

禿つるさる袖の綻ひ 淵柳

かいはゆく口説にわひひ月ヶ宵松 仙

鶴のすゝむ御し擧の塵 蘆翁

吹からに雲に羽織も月も出て 貞橋

波もゆたかに揃ふ船唄 貞國

盃をあらひにやるもはかり事 貞雨

家根葺かへてのうくとする貞玉

杉植たその夜の雨ぞ佛なる 蘆翁

帚子仕立て、正月を待 貞鶴

大名の通た跡に千鳥啼 貞雨

千雨箱の棒かへなく 貞橋

朝の月飛脚の姿む杜若 貞玉

何喰まいとまゝな禪林 貞國

來る程の醫者がふり振て居 貞鶴

虫狩に出て虫に怖かる	好和	二階座敷へとる衝立	蘆翁
行秋を告るは丁戸の腹が減	貞笠	矢さけひの音も聞しる白拍子	貞橘
遊山湯治のぬるければ入	桐翠	口を吸せて氣を引て見る	貞國
花盛兎角彈人を連歩行	里水	嬉しそうに馬の欠込花の山	貞兩
輕着日は鶯の聲	執筆	やよいふかばは遊びてかある蘆翁	貞翁
七りん <small>名チ</small> の火の酔の來る春の暮	琴山	ふり切て名を松島も別れ霜	貞玉
愛敬髮の顔へふぼれる	松鳥	鬚白くと明る東雲	貞鶴
戀すてふ豊後かたりの身繕ひ	淵柳	うそ聞き女術か宿の持佛堂	貞兩
さあらは枕まいらせて横	淵水	娘の聲の割鐘を撞	貞橘
一間つゝ涼しさ渡る表かへ	里川	かゝる時上戸の徳は雪の中	貞玉
雨を聞には速の葉かよい	貞笠	乞食の覗くる橋の下	貞國
瀧壺を濁して左官別れたり	好夕	十分に菊も渡りて後の月	貞鶴

夕部にすこき牛の身ふるい	里水	粟を落し通ふ丑みつ	貞橘
なや木曾の月さへ氷る白の音	桐翠	百姓の胸にふたえる秋の風	蘆翁
うみ芋の溜る御袋の口	里川	取揚婆の笑顔見る	貞雨
妹が來て結 <small>クチ</small> をさす高笑	里霍	寶藏の足代崩す初しくれ	貞玉
ものを思へば狂はしき形	淵水	竹輿で座頭の通る東金	貞國
乗合 <small>名チ</small> をかそへながらに漕離れ	桐翠	早乙女の一人つゝ來る畔傳ひ	貞雨
伊勢路へ入と疊む笈摺	里霍	囀み散して上る神鳴	貞鶴
丸薬に藥を搜せば人も立	淵柳	檀方の侘言濟て寺の主	貞主
咄し上手の返事迄交せ	松仙	風のない日は海の名斗	貞翁
見度に花のあるトの若かへり	松鳥	樂みも二度は渡らぬ花の國	貞國
佐保姫配り渡す短冊	琴山	春をほしみて晝寐せぬ人	貞橘

半歌仙

半歌仙

濡て鳴葉うらや蟬のかり衣	木春	氣に力いらぬ眺や山さくら	貞菊
百性の地は除る川狩	文耕	尻むそかゆき若芝の上	蘆翁
生酔の酒買にさばつかもなし	貞里	庭作り大工人足百千鳥	貞菊
拾はすに置汚き禪	木春	狂うかく終酔に鳧	貞菊
高砂に聲はり上て月見客	文耕	澄渡る月を揉行つれ川	貞菊
友引西爪損の損する	貞里	雨もつ空をかしか鳴出す	蘆翁
秋風の吹に付ても姉の里	文耕	島はれの晝はしらかて秋を知る	貞菊
ふみよいはれぬ先の心根	貞里	此ふみいかに草を付たら	貞菊
門跡のうつと結びし銀小	木春	しらぬひの皮箱張さ成にける	貞菊
瘡のあけて中町も息	文耕	里見崩れの拂物出る	蘆翁
雨雲に逃るやうなる杜若	貞里	市通る喧花の中に牛糞	貞菊
寐所かへて蝸牛はふ	木春	長生坊は寄靈な人かふ	貞菊

よりかゝる壁はしはつく草の庵貞皇	文耕	松杉の嵐に月は浩然火	貞菊
宇治しれてから早い入相	木春	河崎音頭調子合せる	蘆翁
母斗虚病と聞て念者の喪	貞里	前渡り推歌敲か秋の暮	貞菊
夜目には怖しい白無垢の袖	木春	客の舟を引禿等か知恵	貞菊
目預に花表の後ろ花近し	文耕	舞ふ獅の尾にも藝者の鬘紅葉	蘆翁
燕の遊ぶ柳しつけき	貞里	ふみつばいにはふる雪と格子	貞菊

半歌仙

熊笹も水草となりぬ五月雨	芦泰	池の心敲て通る蜻蛉かな	虎山
鳥と虫とをまたぐ蝙蝠	蘆翁	柳のふすへ揃ふ秋風	貞山
ひそりと市の夕暮獅子祝て	蘆泰	月もはや大盃にしくむらし	蘆舟
箕ふ支する程そよ吹に鳧	蘆泰	颯の聲の高い待合	錦山
三ヶ月に取合よき小盃	蘆泰	名にしおふ人の拍子も黒小袖	圓山

相棋の喧花秋の降癖

蘆翁

淋しきものうを染る村紅葉

い

蕪を揚出す瀨へたの壘

い

人買の雲をつかんで旅衣

蘆泰

無理に結せる瘡の黒髪

い

文を見る目は後ろ迄はたらかせ

い

ほろい打にも地震氣遣ふ

蘆翁

銅卵に茶の湯道具を花の山

い

兼好か月雨も瀧も

い

うつかりま家を助ける射就

蘆泰

彌互の杖つく宮の葺替

い

釣舟の耳にからかふ松の聲

い

しら浪に目のいたい關守

貞雨

本尊にて和尚斗の夏木立

貞山

竹輿をらぬて醫者さがす母

虎山

大名を産みろふなつて歸けり

錦山

西日の中に櫛削る音

蘆舟

居風呂を車に乗て冬が来る

貞雨

頓て雪見も近き月影

圓山

獵人の地獄もしらす翁さひ

虎山

すつほりぬけてうつはしる法螺貞山

貞山

伴頭か咄の腰を折て行

蘆舟

はふれ座敷へ渡る反り櫛

錦山

荒法師長刀遣ふ花のもと

貞雨

御製の足をなぶる鹽籠

蘆翁

半歌仙

禪林の睡氣さましや杜若

圓山

硝腦に酔ふ經の虫子

貞山

剃刀に砥るしはくと吸付天

貞賀

掃除仕舞へは隙な夕暮

桃里

冬圍月に障子も立られす

虎山

摺履錆て目出度かりける

貞雨

神風や錢のとはしき旅もする

貞山

傘から傘へ給の宿かへ

圓山

もめて居る田に早乙女の聲達て桃里

桃里

白にもならず千代かける松

貞賀

歌よみ鳥の潜る山門

圓山

半歌仙

花そ今世は浮雲なし梅の照

榮松

歌詠むけりの蛙籠かれ

蘆翁

帆かけ船山の挾より東風帯て

榮松

家はとぼくお竹の裾

榮松

すつかりと一輪溜て蓋のとき

蘆翁

目に見ぬ秋を下戸の首筋

蘆翁

達て来た張子かといは齒か浮る

蘆翁

繁花の嘘はどの稍吹

榮松

ふまめき覺ぬうつしの心より

蘆翁

折角切てかもし又添ふ

蘆翁

老の身の蓄納めは有馬山 貞雨
 又を潜る戀もする哉 虎山
 文箱にしんくのふさのうつたがき貞賀
 吃する蟬よむかふ夕月 桃里
 島の蟹おもしろ過て目が廻る 虎山
 花盗人に折足して遣る 貞雨
 若荷竹に昨日の雨を力よて 圓山
 垣の南につむぐ糸遊 貞山
 半歌仙 夕阿改
 熊笹は暮の面へ丸宵哉 米成
 から騒ぎなる松の風
 櫻の酒から酒へ舌たみて

猫ぬけた夜着の袖から風を引
 焦付食を飛脚よばわる 榮松
 ふらべ見る富士の隣の春によつり
 菴を建なば月を旨さし 蘆翁
 井戸堀か水筋をしる笠の寄
 和光も蕚と愛す飲喰 榮松
 御車へ一枝あまる花の山 蘆翁
 ふれも福壽の種の若草 榮松
 半歌仙 林氏
 百性の夕飯時を月見哉 紫眞
 風のある日の鳴子捨置
 早綿かみな十分に帆を上て

太刀持の手の脂きるふり
 ひよつと来て飛越す月の際
 分る牡丹よ羨あしの道
 遁れたる我よ聞とや渡る雁
 何を咄に引舟の中
 粒錢の財布から出る目釘井
 留袖を着て篠巻をする
 媒に頼む莖菜の王かしは
 青い疊になつて明るき
 本陣は江戸紫の幕を打
 馬士よをそはる金澤の道
 遊園腰に挟て涼む月

喧花の好きな人の大柄
 雪丸の三升の紋の頬かぶり
 扱も上手に付た簪目
 繁昌の内の疊は野郎にて
 乳母に出ルのも岩橋の戀
 嬉しさの餘りて見さる腕の瘡
 燃ぬ薪よ唾を仕懸る
 本北をサシから諷ふ留の門
 けふは開ゆる石町の鐘
 初盤小判と遣て欠て行
 辰松風に味な結やう
 勘當と余ほと大をいふとしふと

味噌を飛やら賑ふる
花簪は帳の向ふに畏り
疊句はして通る養父入

半歌仙

初鷹の糞に濁るや胆しの海

松原氏
貞州

月夜哉松く

さうからし詰り肴にふり懸て

かさはむ人の髭立るなり

本丸は丁八丁の釜の雲

盃にすける馬の草哉

むき捨てけふは柏の夕鼠

かんでか遊ふ法の燈火

落すこ割る地黄入もの

月花の時もはつれぬ按摩取

小袖ひとつも星き道芝

半歌仙

斧をかりにくる夜の寒哉

上州小幡
蘆門

底をはたく腹の交り

貞山

向ふ腰押勝人も撫ららん

貞洲

山を越れば御壺所領

蘆門

むしらるゝ草も孕てけふの月

秋空

おのゝ縁へ逃る鼠火

丹雪

大關の脊中敲けは皆あふら

蘆門

人生七十は窓から鮎

御目出度お袋一人をばすらん

ふり出し薬假の世中

八々鳥は墨繪に寒く在明の

空印公の菴の初雪

神風と申へきもの松の風

變も久しう立かけた儘

はれ越てしほし蚊を焼亂髪

孕て下る淺茅生の宿

守守は旭に光光り危

袖ふし羽織夏が近よる

半歌仙

上州山名
菊水堂連

涼哉留り鴉の數も留め

蘆橋

飼鳥のそ朝もふんする雪見月

眞向の獅の床にふりいく

中飛車に持て参れば艪を抱

まへん粉餅を醫師の口癖

法印の裏すゞしき松はかま

ぬかつた山の夏の夜の霜

一哲に有へきものを鶴の聲

品川を立人の酔醒

桶の花ちすも振合

美男かつらは髪のかさゆふ

首尾

蒸るそよきの岸に泥鰌	菊 要	猿啼て枕淋しき霧夜かお	三十木 臥 牛
引付の近く成寄ル帆の見へて	水 荷	寒さは鷄を待ぬ關の戸	蘆 翁
茶を入ながら下を吹立	水 巴	酒の通帯み釘預りて	
二三里はまた苦にならぬ夕月夜	水 延	先はさらりと済た棋の會	臥 牛
豊後の陰も野の花に出来	水 籠	脚の眉も氣高き鳥帽子達	
大門をまたくと秋の最中なり	菊 籠	諸國のひれを八束穂の奏	蘆 翁
酒のはつみに口舌しつけき	水 羽	木男が彈ても琴はをみなへし	
恨をばあり切投て巻はより	菊 山	直に舞ぬ戀の繼く	臥 牛
牛の寐て居る藪の侍	水 荷	片言ふ祈れと神谷点ゆく	
捨人のと遠なる橋普請	水 延	御顔恐れす呪の息	蘆 翁
汗をかかく程は鉢細季	菊 要	北山の奥も眠ふ花なし	
盗れて葛籠の内の窟風さ	蘆 橋	鶴も羽を長閑なる空臥	一 牛

表白

ひんやりと双もきつい蚤云	水 巴	黒格子穿三絃も常盤木	徳山
縹帯もさは犬にも吼られし	水 籠	後口つきから生た辨天	
和尚へ蕎麥を名主相伴	菊 籠	茶坊主に大事み文を拾はれて	
花の留主視つて棋笥み月清	水 羽	猫の寐て居る常貌の例	
手紙かとぶと鶯も来る	閑 山	出ては又藏に隠るゝ帆かけ船	
		遊を揮ふ我も目はたき	
		松柏に留ては置ぬ暮の月	
		釣臺て来る約束の蘭	
		秋さびし此述懐も生れつき	
		下水の家鴨逆さまになる	
		田樂はいつの頃より狐色	

裏白

朝顔に目出度句を入れて
澁柿菴
 朝顔の富貴や花のかけなし 貞 至
 蜻蛉和國の形をあつかる 蘆 翁
 たりひつ見月み扉は能しれて 貞 屋
 旅にも 鑑のありて 跡附 湖 船

名筆に古硯の銘の理屈なし

蘆翁

かゝる風うそ命なりけれ

貞良

先陣は酔て後陣と入替り

湖松

千代萬代に鯨の蒲鉾

貞屋

四季

雲を咄て霞にむせる箱根山

星川
貞至

宿元は抜て行けり雲の峯

落栗や扱は池ある夜の庭

乞食から先ッ知初つ小夜時雨

亦

行届く春の心や花大根

貞賀

海棠の欠移るふ梨の花

和佐大八のまた咄る

一ッ本て半町計花墨

谷の櫻も四五日の内

題夏の夜の雨

そよ、より蕨は挾る螢哉

貞山

牛飼賣牛に

引る、縹緗

日や永き牛に引れて善光寺

腰懸る心から響て櫻哉

琴に組れ上手に好かれ路の塵

又咲や散にもふりすけしみ花

提菊や十二ひらへの腕まへり

花てさへ似氣なきものを梅嫌

仲や風入江におそる鷗かな

洗ひ髪そつあひもふし枯柳

鶯に人參利て初音哉

鷗や己か足を橋柱

水仙に名所のふきは恨なれ

奉納

鼻に先ふ淨はふれす梅の花

明治廿六年二月五日印刷
明治廿六年二月十五日出版

編輯兼
發行者

加藤福次郎

日本橋區新芳町二番地
親父橋角

印刷者

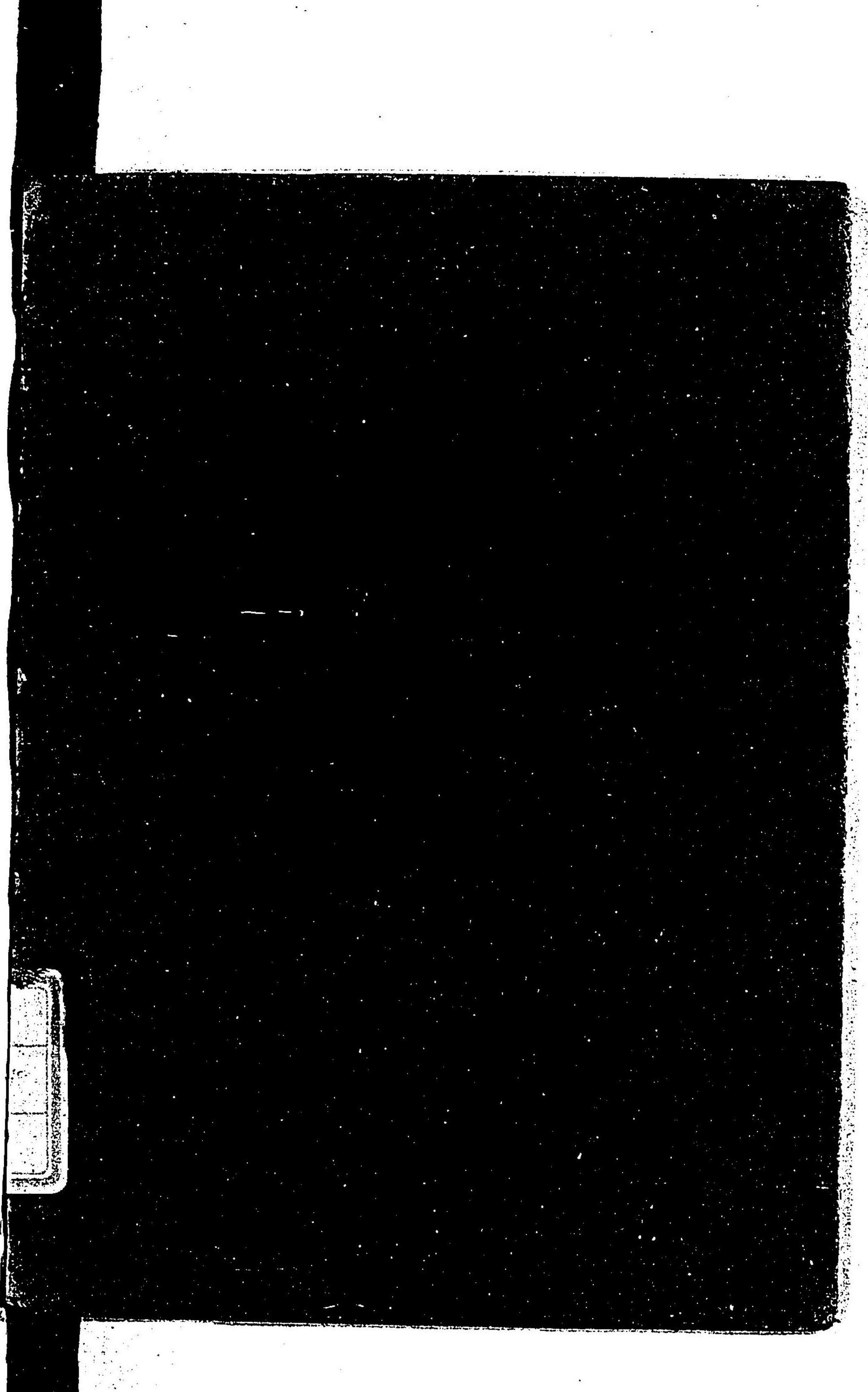
町田宗七

日本橋新右衛門町十番地

發兌元

文龜堂

日本橋區新芳町二番地
親父橋角



087323-000-7

特64-828

俳諧手挑灯

加藤 福次郎 / 編

M26

DBE-0610

